



遠い国のおはなしシリーズ

勿忘草に口づけ

苔田 カエル

目次

◇◇◇◇◇	1	◇◇◇◇◇	1
◇◇◇◇◇	2	◇◇◇◇◇	6
◇◇◇◇◇	3	◇◇◇◇◇	15
◇◇◇◇◇	4	◇◇◇◇◇	23
◇◇◇◇◇	5	◇◇◇◇◇	32
◇◇◇◇◇	6	◇◇◇◇◇	43
◇◇◇◇◇	7	◇◇◇◇◇	53
◇◇◇◇◇	8	◇◇◇◇◇	63
◇◇◇◇◇	9	◇◇◇◇◇	73
◇◇◇◇◇	10	◇◇◇◇◇	85
◇◇◇◇◇	11	◇◇◇◇◇	97
◇◇◇◇◇	12	◇◇◇◇◇	112
◇◇◇◇◇	13	◇◇◇◇◇	127
◇◇◇◇◇	14	◇◇◇◇◇	147
奥付			
89			158
91			160
読書上の注意			161
おまけ 時代背景			162
奥付			164

わすれなぐさ

キルヘルム・アレント

訳：上田 敏

ながれのきしのひともとは、

みそらのいろのみづあさぎ、

なみ、ことごとく、くちづけし

はた、ことごとく、わすれゆく。

(上田敏訳詩集『海潮音』より)

◇◇◇◇◇ 1 ◇◇◇◇◇

遠い国のおはなしです

「主は天に御国をお造りになられました
そこでは 苦しも悲しみもなく
全ての人が 平等に 永遠の救いを得るのです」

「わたくしもですか？」

「ええ 勿論です」

「わたくしの様な 褐色の肌に 黒い髪でも？」

「だから 懺悔なさい

主を信じ 悔い改めれば

あなたは永遠に救われるのです」

「わたくしは死など怖くはないのです」

「ええ 分かってますよ」

「お嬢様にお会いできましようや」

「それはどう言うことでしょう」

「お嬢様は 既に・・・・」

神の門をくぐれば お会いできるのでは」

「ああ やはりそうなのですね

ならば 一刻も早く 救ってさしあげねば」

「わたくしが？」

「全部話すのです 回心して

何も恐れることはありません

主に 全てを委ねるのです」

「全部話す？」

「あの方は 今 何処に居られるのです

早く助けてさしあげねば 悪魔に見つかる前に」

「ああ わたくしが お嬢様を・・・」

「そうです 一刻も早く

次の面会日には 司祭様と参りましょう」

「司祭様？」

「心配することはありませんよ

司祭様はお優しい方ですわ」

「修道女様・・・」

「神の御国へ迎えられるのには

まずは教会の扉をくぐるのです」

「修道女様・・・」

「わたしを信じて

全てを委ねるのです」

幾度かの慰問で

幾度とな 主の御言葉をかけ

幾度か目に やっと心を傾けた

彼の女性を前にして

その瞳から 賤しさなどは感じえず

全身からは 妬み恨みの荒さもなく

寧ろ 遠く臨み焦れる瞳には

乙女の頃の一途さが

全身には 愛情を滲えて

しかし その瞳の先には何もなく

その愛情は 向ける相手が誰もなく

ひたすら 幻を追って

彼の女性が 唯一 恐れるとしたら

それは 愛する者の不在

世間の好奇の目では 到底 図れるまい

永遠の救いようのない孤独に陥る前に

わたしは 司祭様とともに

また再び 彼の女性を訪れました

「人は生きながらにして罪深い
ましてお前は 大きな罪を犯した
さあ 主に赦しを請うのです」

「嘘です
わたくしは 確かに罪深い
しかし お嬢様に悪いことなどないのです」

「そうか そうか そうであろうが
人は 知らず知らず 罪をおかす者
どんな人にも 小さな嫉妬や嘘や」

「いいえ
わたくしは 確かに嫉妬深く嘘もつく
しかし お嬢様は何時に於いても清いのです」

「そうか そうか
ならば一層重かろう
その方の罪まで 負ってしまって」

「どうして辛いことがありましょ
お嬢様をお守りするのが わたくしの役目
常に清らかで美しい わたくしのお嬢様」

「主は そんなことはお望みではない
お前が罪を抱え込むなど」
「わたくしが 望んでいるのです」

「いいや あ そうか そうか そうであるなら
その方は 従順なる神の子であるが故
常に清らかでいられるのであろう」

「ええ 正に神様の様な清らかなお方」
「お前とて 神の子になりえるのだよ」
「わたくしが？」

「だから 回心なさい
全ての罪を告白し 悔い改めるのだ」

「本当に お嬢様は・・・」

「信ずる限り 神の御子イエズスの購いにより
罪は許され 永遠の救いが約束されるのです
お前もそして お前の大切な方も」

「ならば告白致しましょう 司祭様」

「では わたしは・・・」

「待って 修道女様はここに」

彼の女性が わたしの腕を引き寄せました
縋るように 思い詰めて
なんとも不安定で か弱いことか

人が吐き捨てる程 浅ましくもなく
人がなじる程 凶暴でもなく
健気なまでのしおらしさ

訛りのない美しい発音
ゆったりとした静かな口調
それはまるで貴婦人のごとく

本当に 彼の者は異国の者か
本当に 彼の者は奴隷あがりなのか
心地よい言葉に 酔うほどに

どうして たいそれたことができよう
彼の女性の犯した罪が
全てが 幻であってくれますよう

しかし その不安定さ
何かが 違う
やはり どこかが・・・

「司祭様 本当に神の御国はあるのでしょうか」

「ああ 勿論だよ」

「本当に お嬢様をお救い頂けましょうや」

「お前が嘘の告白をせず
心から神を信じ 赦しを請うのならば」

「本当に お嬢様に会えましょうや」

「主の御心のままに」

「お嬢様は わたくしを許してくれましょうや」

「全てを委ねるのだ」

彼の女性は 泣き崩れました

縋るように 神を請うて

わたしの腕の中で

司祭様が 優しく誘われました

「さあ 主の御前に

お前は 既に 導かれている」

「ならば 告白致します

わたくしの罪を

嘘偽りなく 全部 お話致します」

◇◇◇◇◇ 2 ◇◇◇◇◇

わたくしのお嬢様は とてもお美しい
何れの何方よりも 何れ いずれ
世に有る何よりも

高く輝くお日さまよりも
全てを照らし 輝き放つ
お嬢様は わたくしの自慢です

ならば わたくしは神様に感謝致します
あのお方に 巡り合えたことを
あのお方に お仕えできたことを

母は 奥様のご実家に買い取られ
馬番をする父と知合い
わたくしは その馬小屋で育ちました

奥様が 異国に嫁がれ懐妊されて
わたくしは子守の為に貰われました
わたくしが 10に満たない頃にございます

奥様のご実家は貿易商で裕福で
大奥様はご教育熱心なお方で
使用人には 特に 厳しゅうございました

お嬢様が誰よりも美しいのは
教育の賜物に依るのでしょね
何より たち振る舞いがお美しい

お嬢様を通った道には
未だ硬い蕾の花さえも綻ぶような
爽やかな風が通り過ぎていくのです

大奥様は 遠く離れたお孫様の為に
洗練された家庭教師を つけられました
祖国の最新のご教育と正しい作法を忘れないように

旦那様は 大きな工場を持ち
何時も忙しく 都市に住まわれ
田舎の大きな御屋敷とを 行ったり来たり

お嬢様は どんどん愛らしくなられ
お会いするたび 旦那様は目を細め
しかし ある時 旦那様の痛に障ったのでございます

お嬢様には 旦那様とは違う言葉で話され
旦那様には それを お心の隔たりとさえ思われ
怒って家庭教師を解雇されたのでございます

お嬢様は 心までもお美しい
慈しみを おかけになさいます
どんな小さな つまらないものにさえ

牙を剥く野良猫さえ
お嬢様のお優しいお心に触れたなら
その手で撫でてくれと擦り鳴くでしょう

奥様の国を思わす全てのものは
全部 取り払われ
わたくしも 捨てられるはめになりました

それを お嬢様が懇願して下さいました
旦那様に 抱きついて
わたくしの為に 泣いて下さったのです

たどたどしい可愛いお口で
大きな瞳が溺れそうなほどに 涙をためて
頬まで溢れて 真っ赤になって

もしもあの時 わたくしが捨てられたなら
わたくしはどうして生きたのでしょうか
いいえ 他の人生などあり得ません

お嬢様は お美しいだけではなく
更に 賢くおありです
その上 努力を惜しみません

もしも学者であったなら
人の為になる よい学者におなりでしょう
しかし 旦那様は 別のことをお望みになった

可愛い娘となり
よき妻となり
家の役に立つ様に

旦那様は 一流の女性に仕立てる為
選りすぐりのご教育をなさいました
立派な家庭教師をおつけになって

わたくしも 身に付けたものを払拭する様
徹底的に 叩きこまれました
言葉や 忠誠心を

その頃でしょうか
奥様の浪費が始まったのは
堅実でらした奥様が変わられました

お嬢様の繊細な美しさは
人の心を慮るせいにございましょう
二つの祖国で 揺れ動いて

例えば ナルシストな雲雀でさえ
お嬢様の輝きが曇ったと知ったら
歌って慰めて差し上げたいと思うでしょう

旦那様は 仕事が益々お忙しくなり
奥様は 贅沢に心奪われ
お嬢様のお心は引き裂かれました

それでも何とか繋ぎとめようと
奥様の寂しいお心に
禁じられた言葉で 話しかけられたり

お勉強が終わられた後は
わたくしも加わって
懐かしい歌を 歌って差し上げたり

お嬢様は お二人の心を繋ごうと
旦那様に お手紙を書かれたり
空しい努力は 続きました

お嬢様の美しさに 憂いがあるのは
更なる哀しみに襲われたからです
誰も知らない わたくしたちの秘密です

一瞬の煌めきは 永遠の別れに
お日さまが沈めば また昇ると言うのに
お嬢様は 明けぬ闇を 持たれてしまわれた

まだ初々しい少女の頃の初恋は
あまりにも美しく
そして 儂いものでした

純粹であるがこそ 思いは強く
互いを 引き寄せあうのでしょう
無垢であるほどに 強烈に

些細な種火は 急速に燃えあがり
焦れた胸を癒すが為に そのお姿を求め
遂には思いを確かめたくなったのです

しかし お嬢様はまだ若過ぎて
恋が危ういことを お知りにならない
その初恋が 全てであると疑わずに

お嬢様の潤う美しさは
恋することを お知りになって
愛されることを お知りになって

小鳥が 投げられるパン屑を
どうしても お嬢様の手から啄みたいと
可愛く囁り 強請るように

そのお方は お嬢様に夢中になりました
若くて 雄々しく お美しい
大地主のご子息様

肌は健康的に焼けており
黒い髪は 益々 凛々しくお顔を引き立たせ
勿論お相手に申し分はございません

恋に落ちるには あっという間で
惹かれ合う二人は 時さえも超えるほど
若い二人は 瞬間さえも惜しむことなく

隔たった距離さえ ものともせず
例え目の前におらずとも
魂は 常に 依り添っておいででした

お嬢様のお美しさが 頼りなげなのは
依り添う方を失って
思いの行方を見失って

出口のない迷路があるとしたなら
喪失という迷路でしょう
お嬢様は そこに迷ってしまわれた

冬に積った寝雪が 春の芽に
あれ程堅く 永遠の忠誠を誓ったのに
解けた雪は 跡形もなく流れてしまったよう

彼のお方は 変わらぬ愛を誓ったと言うのに
国を あなたを 守らんが為と
託された 一房の勿忘草

彼のお方は 去ってしまわれました
冷たい土の中に
お嬢様の頬に 帰らぬ温もりを残して

永遠を誓うには 未だ若すぎるというのに
魂を捧げるには 未だ早すぎるというのに
なのに お嬢様は 彼のお方の面影を慕い続けて

お嬢様の 哀愁深い眼差しに
いち早く気が付かれたのは
こともあろうに 旦那様でした

奥様は 夢見がちな少女のまま
恋もそこそこ 早くにご結婚なされ
ご自分を飾るのに夢中でしたから

家庭教師の先生方も 他の使用人達も
何れの何方か 誰も知らず
わたくしは その名を勿忘草にそっと隠して

勤ぐる旦那様を 沈黙の頬笑みでかわし
お嬢様は 心のずっと奥底に
その勿忘草を お植えになってしまわれたのです

こうして お嬢様の初恋は終わったのです
消しようのない 面影を植え付けて
田舎での暮らしとともに

その頃でしょうか
奥様の気性が激しくなられたのは
大らかだった奥様が変わられました

お嬢様の美しいまでの誠実さは
勿忘草への誓いにございましょう
余りにも 早まった誓いにございます

旦那様は 知っておいでです
若い恋は 何をも恐れないことを
若い恋は 全てを壊す力があることを

旦那様は お嬢様を呼び寄せたのは
目の行き届くように
いよいよの その時に備えて

しかし 旦那様は お知りにならない
既に 恐れを知らないその恋が
お嬢様のお心を 占領なされてしまったことを

余りにも 早まった誓いにございましょう
やっと迎えた春の日に 芽吹いた矢先の可憐な花が
美しい花も咲かせず 堅く蕾ませているなんて

わたくしが 風であったとしたら
優しく揺すって 懇願するでしょう
どうか わたくしの為に咲かせて下さいと

お嬢様の 匂い立つ美しさを
誰が 見捨てておけましょう
誰が 見逃してしまいましょう

雲の風は 一片の花弁を撫でたいがため吹くのでしょう
降る雨は 一株の花を目がけて降るのでしょう
行く川の水は 一輪の花に触れたいがため行くのでしょう

粗野者は 荒れた心を道化で隠して
賢い学者様は 赤らむ頬を知識で覆って
貴族のご子息様は 爵位を着飾って

商人は 高価な贈り物を
詩人は 酔わす言葉を
貴族のご子息様は 権威を振舞われる

ただ一株の その一輪の たった一片でも
触れたいがため
気を引きたいがため

いいえ お嬢様のお心を どうして動かせましょう
既に咲き誇る 一房の勿忘草を
しかし 旦那様は野望を抱かれた

お嬢様の全てを兼ね備えた美しさが
何物にも代えがたいのを
旦那様は お分かりです

どんな地位も名誉でも
どれほど積まれた金貨でも
お嬢様の美しさに 勝るものはないのです

旦那様とて 行いも身なりもよろしく
人望までおありで
勿論 お金も名誉もお持ちです

ただお持ちにならないとすれば
それは権威にございましょう
爵位の称号にございます

旦那様は 取分け高い野心を抱かれました
お屋敷にお出での 貴族のご息様のうち
一番高い地位の方に

なんと 恐れ多きこと
世には 誉れと申すべきなのでしょうね
しかし わたくしには恐ろしいことに思われました

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

彼の女性は 身を震わし
哀しみに拉がれた面持ちで
わたしの顔に 視線を送りました

「修道女様わたくしは愚かな女にございます
全ては わたくしの愚かさが招いたことにございます
全ては わたくしの愚かさが原因なのです」

「誰にでも 過ちはあるものだ
お前は 自分の罪を罪と認めておるではないか
そして 悔いているのだろう」

司祭様が 静かに彼の女性に言葉を送ると
彼の女性は 何度も何度も 頷き
小さく 小刻みに震えながら

「しかし 恐ろしいことです
恐ろしいことなのです」
彼の女性は 救われようのない苦しい表情で

「わたくしの醜い心が引き起こしたのです
わたくしが 旦那様を殺したも同然なのです」

そう言って十字架を見上ると また 話し始めました

◇◇◇◇◇ 3 ◇◇◇◇◇

お嬢様の明るい栗色の巻き毛は
その美しいお顔を 更に 優しく飾るのです
とても 晴れやかに

それは 一片の曇りなく
欠けることなく
清らかな日差のように

それなのによいのでしょうか
許されるにしかるべきことなのでしょう
許嫁とされようそのお方の本性は

どんな高位な貴族様とて
どんな美しい着物に身を包んだとて
汚れた魂は隠せないのをございます

許嫁とされようお方は だらしないのをございます
その行いに お金に 全てにおいて
特に 女性に関して

ご貴族様にありがちな享楽に身を窶す
どっぷりと浸ったお方なのです
こんな嘆かわしいことがあってよいのでしょうか

水浅黄色したお嬢様の瞳が揺れるのです
ゆらゆらと 惑うよう
許嫁とされようことを果敢なんで

お嬢様の澄んだ瞳は分かっておいでなのでしょう
そのお方から吐かれる言葉は 真実か
その贈られる真心は 本物か

夜の帳が下りた頃
繰り広げられる乱痴気騒ぎは
勿論 お嬢様にはご存知ありません

神々しいまでに褒め称えたその口で
遊び女どもを口説いているなど
口が裂けても申せません

しかし わたくしは知ってしまったのです
それは偶然 ええ 初めは偶然
良からぬ噂を耳にしたのでございます

今思えば ぞっとするほど恐ろしいこと
しかし わたくしに何の迷いがありましょう
あのお方の 悪行全てを暴いてやろうと

お嬢様の 長くくるんとした睫毛が閉じて
澄んだ瞳をしまわれて
健やかな時が眠るころ

わたくしは ジプシー女に身を変えて
歓楽街に身を投じたのでございます
それは 淫猥な世界にございます

わたくしには いかばかりかのお金がありました
身を正しく整えるためのお給金です
お嬢様の下女として恥ずかしくないように

それで わたくしは買ったのです
死にかけてジプシー女から
着物を一切合財 持ち合わせのお金全部と交換して

ああ神様 何が悪いことありましょう
身を保つ為のお金で ジプシー女の服を買ったとて
あの者は そのお金でパンを買ったでしょうに

淫猥な世界とて お嬢様をお守りするがため
確かな証拠を捕まえて
旦那様に突き付けるがため

お嬢様の白い頬に 赤みがさし
その瞳に 光が射して
その美しさに 輝きに戻るまでに

わたくしは 戯れ遊ぶ者達の群れを
薄汚い路地裏を忍び回り
そして もとの慎ましやか下女に戻るのです

ああ神様 何故に殿方をお創るになられたのでしょうか
何故に あの様な性質をお与えになったのでしょうか
男と言う男 全てがああなののでしょうか

卑猥な言葉を投げ合って
馬鹿笑いをするが為に安酒に酔うのです
お嬢様に愛の言葉を捧げる方々までが

ことに許嫁とされようお方の本心は
旦那様のお金です
そして お嬢様の美貌です

その口で お嬢様に永遠の愛を誓うとは
その手で お嬢様を触れようとなさるとは
まして その汚れた口を押し付けようとするなんて

時として お嬢様の細く白い指が
わたくしの髪を撫でるのです
愛しそうに この黒髪を

水浅黄色の光に映された
この黒髪の遠く彼方を恋うて
そして 悪魔が わたくしに囁いたのです

わたくしは ぞんじていましたから
許嫁とされようお方は 卑劣な小心者であることを
しかし それほどまでとは

わたくしは それとない仕草で
物憂げな視線で物欲しげに
つまり 誘惑したのでございます

なんとたいそれたことでしょう
わたくしも半ば あの世界の住人なのです
気が付かないうちに わたくしも

人目を避けておびきよせて
ええ 分かっていたのです
陰には 旦那様がいらしたことを

お嬢様の眩い栗色の髪を結い上げて
白く その穢れのないしなやかな首筋が
わたくしの心を締め付けるのです

何にも穢されたくないと
唯一 許されるとしたら
それは 真実の愛だけだと

わたくしに 何の躊躇いがありましょう
わたくしは 身を摺り寄せ
あのお方は 隠すことなく情慾を剥き出しにし

しかし わたくしは焦らすように身を引いて
そして 怯えながら囁いたのでございます
「待って 誰かあすこにいる」と

それは 些細な悪戯な心からです
無理矢理強いられた振りをしようと決めこんで
何処ぞの父親が そんなお男に娘を嫁がせましようや

まだ少しでも気骨があおりであったなら
しかし あのお方は どうしようもない臆病者なのです
あの方は かたっとした物音だけに撃ってしまわれた

お嬢様の ふっくらとした柔らかい胸が
鋼のように硬直した瞬間にございます
どれ程 打ち拉がれたことでしょう

一体 何れのどのの方が想像し得たのでしょうか
赤く飛び散る血飛沫に
その断末魔は お屋敷の方々の心まで撃ったのです

お嬢様は 暫く お食事もお取りになれぬほどに
こと奥様は 哀しみと 寂しさと 恐怖とで
遂には 失神するまでの痲癩をお持ちになられたのです

ああ それなのに嘆かわしい
当のあのお方だけは 饒舌に嘘を幾つも並び立て
立派な弁護士をお付けになって 罪を逃れてしまわれた

よからぬ者が忍び込み 潜んでいたのだと
旦那様も また そう勘違いなされて
退治してやろうと 互いに思って

旦那様は草刈の鎌を あのお方は銃で
いいえ 旦那様は鎌を振り上げるなどそんな余裕さえなく
振り返りざまに撃たれたのでございます

まるで闇です
お嬢様から零れる頬笑みが失せて
月のない 星一つもない 森のよう

それは漆黒の闇です
真っ赤な頬が 青白くこけ
太陽を失くした 夜のよう

わたくしも また さ迷いました
こともあろうに 歓楽街を
当てもなく さ迷い歩いたのでございます

逃げるように
あの健やかだったお嬢様との生活から
多分 罪悪感から

ジブシー女に身を変えて
もはや それが当たり前のように
はたして どちらが本当のわたくしなのか

薄暗い路地裏さえ 快い明るさに思え
その薄汚ささえ ものともせずに
本来のわたくしは あちらの世界なのかも知れません

あの穢れのない瞳で見つめられたら
あの真実のみを求める唇で問われたなら
そう思うといたたまれなくなるのです

勿論 お嬢様はご存じありません
わたくしが ジプシー女に身を棄しているなど
想像さえもなされておりますまい

それなのに わたくしときたら
どンドン 穢れの沼にはまりこみ
いいえ どっぷりと

楽しいのでございます
あれ程侮蔑していた卑猥な言葉さえも
愉快なのです あの乱痴気騒ぎが

いっそのまま 愛のない言葉に溺れて
この肉体さえも 投じてしまおうかと
いえ その欲望にかられて

それ程 わたくしは腐りきっていたのでございます
一体 何れの何方様が 良家の下女と疑いましょうや
誰もが ジプシー女と疑いますまい

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

彼の女性はそう言うど 悲しげに
「修道女様 軽蔑なさいますか
こんなわたくしを」

わしには どう答えていいのやら
何故なら とても いえ 全く
そんな世界は 到底 結びつかないので

「その時 正にその時です
あの人に 出会いましたのは」
彼の女性は わたしの顔を凝視して続けました

「あの人 その その人が仰ったのです
『あなたはここに居るべきではない』と

その時 目が覚めたのでございます」

「なんと 主の思し召しでしょう」

わたしは 直観的に そう呟きました
「主の・・・思し召し・・・？」

彼の女性は そう なぞるように呟くと
口を閉ざしてしまいました
その言葉を 嘸み締めるようにして

どうしてあの時 気にも留めなかったのでしょうか
いえ 気にはなってはいたのですが
大切なこととは 思わなかったのです

彼の女性は そして 唐突にまた喋り出しました
「修道女様 わたくしは聞いたのです
放蕩としてさ迷う中で ある噂を」

今度は声を潜めて 司祭様まで届いたであろうか
「修道女様 あのお方 今では立派な伯爵様は
確かに あの時 旦那様と分かっていらしたのです」

それは とんでもない告白
「旦那様は 全てご存知の上でございました
あのお方は あっちこっちに借金がありなことを

それも あの悪名高き金貸からもですよ
それでどうしても お金が欲しかったのです
あの手この手で捲し立てて

しかし 旦那様は 一切 その手にはのらず
それで邪魔になったのです
奥様とお嬢様なら その・・・誑し込めると」

わたしは とんでもない告白に息を飲みました
激しい動揺に襲われ 司祭様に視線を向けたら
目を深く瞑られ 小さく頷かれただけでした

「理由はどうであれ わたくしが
その機会を わたくしは作ってしまったのです」

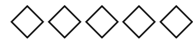
慰めようのない程 彼の女性は自分を責めました

「旦那様は お分かりでした
お嬢様のお気持ちを
わたくしなんかよりも ずっと深く」

取り返しのつかない罪を悔やんで
「旦那様は 思案されておいでだったのです
如何に お嬢様との縁談をお断りするかを」

彼の女性は 耐えきれずに司祭様に訴えました
「司祭様 神は裁いてくれましようや
旦那様の仇をとってくださいましようや」

「何人なりとも 神の審判は下される
全ては 主の御心のうちに」
そして 司祭様は宥める様にそう仰いました



折れそうに括れた腰の華奢なお身体で
お嬢様は 全てを支えることになったのです
悲しみにくれる暇もなく

こと奥様に至っては 後悔の念から
時に正体が分からなくなるまでに
錯乱なされたのでございます

奥様は悔いておいででした
決して憎いとまでは思っていらっしゃらなかったので
心を閉ざされたまま 旦那様を亡くされようとは

ただ懲らしめてやろうと思っただけなのでしょうね
それが 折れる機会を失って
いつの間にか 大きな溝となったのです

そんな奥様を お嬢様は気づかわれました
発作の時は ずっと付き添われて
寝しなには 好きな詩を朗読してさしあげて

あの貴族様ですか？
どうして見せる顔がありましょう
旦那さまへの借金さえも 踏み倒して

柔和なお嬢様のお顔が きつくなられました
急に 人を避けられるようになられたり
お屋敷の門を 堅く閉ざしてしまわれたり

心に植えた一房の勿忘草を握り締め
ずっと強く 頑ななまでに
心をお閉めになってしまわれました

それも仕方のないことでございましょう
旦那様が あの様な目にあわれたのですから
それでも旦那様は 十分な資産と権利を残されました

しかし 奥様は なのに 奥様は
とり憑かれておしまいになられたのです
どんよりとした雲が 取り払われたかと思えば

一年の喪が明けるか否や
突然 思いたったかのように
堅く締められた門を 開け放ったのでございます

奥様のはしゃぎように お嬢様も良き徴候かと
いえ それは 善からぬ前兆で
動き出しら止まらないのでございます

小鳥のように軽い 可憐なお嬢様の足音が
戸惑いがちに 忙しく
お屋敷中を 飛び回るのです

奥様は 大勢の方々を招き入れ
時には遠方より 時には名のない者まで
賑やかなサロンをお作りになられました

元が 華やかなご性格でいらっしゃいます
社交的で 大らかで 楽しいお方です
目も 舌も 耳も 肥えていらっしゃいます

奥様なりのお考のことなのでしょうが
それは お嬢様を困憊させ
執事の算盤を お悩ましになされ

それも お嬢様は母君様のためと
一時の憂さ晴らしと お思いになられたのでしょうかね
しかし 治まるどころか 益々 派手に

一流の音楽家も お呼びになられました
宮廷で演奏する程の方々です
そこで わたくしに歌うようお命じになられたり

お嬢様は 休む暇さえない程に
しなやかな腕が ひっきりなし舞うのです
川の流れのように 行き交う方々をお迎えになって

以前にも増して 立派な方々をお招きして
奥様は 夢をみておいでなのです
お嬢様に相応し 最高のお相手の

誰もが お嬢様のお手に触れようと
その可愛いらし口から 言葉を頂こうと
我こそはと 押し寄せてくるのです

されど お嬢様のお心には 一房の勿忘草
どうして そのお心を動かせましょうや
遠い昔の面影を追って

はてさて とあるお国の若き外交官様
お嬢様のお心に 隙間をお開けになられたのは
黒髪の美しい 知性的なお方です

しかし 奥様はお気に召さずに
以前にもあからさまに
お婿様選びに専念なされました

お嬢様の 再び咲かそうとなさるお心を
誰が 止められましょうや
誰が 変えられましょうや

雲の風は 一片の花弁をかすりもできずに吹き去るのです
降る雨は 一株の花に到達もできずに逸れるのです
行く川の水は 一輪の花に留まりもできずに行くのです

遠い記憶を呼び起こす たなびく黒髪
閉じておしまいな 愛の言葉を囁き
鎮めてしおしまいな 種火を燻って

時間を超えて
哀しみを超えて
お互いのためのみに存在しうる魂だけが

たった 一株の 一輪の 一片の花弁を揺すって
偲ばした思いを 目覚めさせるのです
揺らぐことのない永遠の愛を

なのに悪魔は 人に何を忍ばすのでしょうか
忠誠心には 裏切りを
豊さには 浪費を

無邪気な頃のお嬢様の頬笑みを
ただ 愛だけに向ける頬笑みを
あの屈託のない頬笑みを

もしも 永遠であるのなら
わたくしは 悪魔とだって契約します
この魂さえも 差し出します

しかし悪魔は 執事に囁いたのです
執事の献身的なお嬢さへの愛に
奥様の無邪気なお言葉によって

奥様も わたくしも 勿論他の使用人達も
執事のお嬢様への秘められた思いは感づいておりました
それは叶おうはずもないものです

奥様は からかわれたのです
皆の前で お客様や 使用人達の前で
分不相応な思いあがりだと

お可哀そうに
それも お嬢様の目の前で
当のご本人が 一番分かっておいでなのに

お優しいお嬢様には かけようお言葉がなく
寧ろ そのお優しさがあだとなって
憎悪にかわっておしまいになったのです

一度許した心の際は とめどもなく
善からぬ方へとひたすら向かうばかりで
お嬢様に捧げた忠誠心さえ捨てしまわれた

執事は ある企てを建てたのでございます
短い時間で できる限り 権限を利用して
旦那様の数ある領地の名義を 書き換えたです

勿論 ご自分のお名前に
そして その日のうちに姿をくらましておしまい
誰も 領地を奪われたなど思いもよらぬ間に

気が付いたのが 奥様の散財の請求書が届いてのこと
しかし 既に遅く 支払いは困窮し
それを見計らって 執事が肩代わりの申出にやって参りました

たいそれたことにごございます
恐れ多いことに 代わりとして お嬢様をくれと
勿論 奥様は全く聞く耳は持ちませんでしたけれども

お嬢様は 妖精達が舞うような美しい筆で
これまでの献身的な忠誠へには お礼を
奥様のご無礼に対しては 謝罪を認め

反して奥様 反省するどころか 益々いきり立ち
更に 罵倒の数々を浴びせたのでございます
貴婦人に有るまじき言葉まで吐き捨てて

当の執事は 奥様に謝罪と生活を改めるお心があれば
退職金だけ頂いて 全部 返す気になっていましたものを
しかし 更に へそを曲げておしまいになられたのです

散財をお辞めになって 普通にお暮らしになられたなら
工場などの権利だけでも 充分やっていけますものを
奥様は 益々 意固地になってしまわれたのです

悪いこととは続くものでございます
一端 転がり出した坂道は
どこまでも 転げ落ちて行くものなのですね

奥様は 遂には借金をしてしまわれました
こともあろうに あの悪名高き金貸から
そして 以前にも増して 豪勢に振舞われたのでございます

お嬢様のお諫めになるお言葉にも
異国の外交官様の求婚の求めにも
奥様は 耳をお傾けになろうとはなさらず

されど お嬢様にとっては
奥様にしても 異国の若き外交官様にしても
かけがいのないお方でありますものを

それを 奥様はちっともお分かりになって差し上げない
いいえ 恐れておいででした
異国に去る寂しさに 一人置かれる寂しさに

ああ 悪魔は更なる陰謀を企てたのでございます
あの悪名高き金貸が 野心を露わにしたのでございます
なんともおぞましい

奥様が借りられた多額の借金は法外な利子もついて
どうにもこうにもならない程に
膨れ上がってしまったのでございます

分かりきったことなのです
わたくしのような端まで知る程の悪評なのでですから
あの男から借りれば 生き血までも吸い尽くされると

衝撃は 当惑するお嬢様目がけて
周到に放たれた矢の如く
鋭く 襲ってまいりました

あの金貸が 全額返済を請求してきたのでございます
今までへらへらとしていたその顔を 釣り上げて
猫なで声のおべんちゃらを 怒鳴り声に変えて

恐ろしい形相にございました
さも悪魔のごとき所業にございます
完済できねば娘を貰う と申ししてきたのでございます

更に こう 申したのでございます
「やんごとなき方々 名のある方々の恋焦がれる姫君を
わしが買ってやろうではないか」

愉快そうに 何度も何度も
「わしの嫁に 買ってさしあげよう」
そう 申したのでございます

ああ おぞましい
穢れきお嬢様を なに故 あの様な者に
あんな汚物まみれの年寄りに

神々しいまでに清らかなお嬢様を
お金で買おうなどとは
正に悪魔のなせる技にございます

一片の花弁を避けた風は 別の花弁を撫でようと
一株の花を逸れた雨は 他の株を目がけて
一輪の花を過ぎた川の水は 次の花へと

人々は 去ってしまわれました
自分達に 災いが飛び火しないように
それに 多くの使用人達までもが

残ったのは 行き場のない老いた下男にわたくし
そして あの お方 異国の若き外交官様
あのお方だけは ご自分のことのごときに思って下さり

お屋敷も工場や会社の権利も合わしたとて遠く及ばず
大奥様の亡き今は ご実家には頼れようはずもなく
奥様は やっと ことの重大性をご理解なさいました

しかし 時 既に遅く
もう 従うしか他はなく
過ぎ去りし日々を ただ 恨めしく思うばかり

悲壮に嘆くお嬢様の後ろ姿
夕焼けに映しだされたそのお姿は
お心の底の叫びのよう

わたくしに 何ができると言うのでしょうか
されど 何もせずにいられましようや
夕焼けが 引き裂かれたお嬢様の血のようで

金貸は 1か月待つてやると高笑いをして
ボロネズミの様な鬘をふりみだし
歯っ欠けた口から唾を飛ばして帰って行きました

どうして渡すことができましようや
わたくしが お小さな頃よりお仕えしたお方です
宝石の零のごとき大切にお育ちになられたのです

悪魔は あからさまに迫って来ると言うのに
姿を現しては下されぬ神様を 恨めしくも思い
しかし 神様はちゃんといらしたのです

外交官様が 巷の噂をお耳にし
わたくしは 金貸をはったのでございます
行きつけの安酒場に蹲って

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

「修道女様 修道女様も 司祭様も御存じでしょう
あの事件を 大きな事件でしたから
国を巻き込んだ 大きな詐欺事件でございます」

彼の女性は わたしに目を見開いて
わたしは その鋭く光った瞳にたじろぎはしたが
恐らく あの事件のことであろうと頷いてみせました

しかし 何故？
あのだいそれた事件が この者と関係しているのか
わたしには 全く腑に落ちませんでした

それは ある詐欺師が偽の儲け話を持ちかけて
お金を騙しとるといふ事件でした
貴族や要人達多くの金持ち達が騙されました

当時の財務大臣も ご多分に漏れず
初めは高利な配当で すっかり大臣を信用させ
国の金庫のお金も投資するよう唆したのです

監査日迄には 多額の配当を受け取る筈でしたが
何かの不幸で お金は大臣の手元に渡らず

補填はしたのものの発覚 大臣は罷免となりました

「財務大臣が騙された あの事件ですか」

「ええ さようでございます」

わたしは 息を飲んで十字を切りました

「詐欺師は捕まり 処刑されましたが

金貸の方は 投獄されただけにございました」

彼の女性は さも残念そうに言いました

「何故だかお分かりになりますでしょうか？」

そして またも声を潜ませて

「あの伯爵様が手をお回しになったのです」

どうにもならない理不尽さを非難するように

「大臣様は 伯爵様の政敵でいらっしゃいましたから

勿論 伯爵様が謀ったことは表ざたには……」

わたしは ここまででも何度十字をきったことか

とんでもない告白に 胸が高鳴るばかりで

司祭様は 天を仰ぎ深く瞼を閉じられました

「わたくしは 確かに 見たのです 聞いたのです

あの詐欺師と金貸が話をしているところを

悪だくみをしているところを でございます」

◇◇◇◇◇ 5 ◇◇◇◇◇

完全たる暗闇など 果たしてありましようや
お嬢様をお助けする僅かな希望の光を
異国の外交官様とわたくしは 探ったのでございます

外交官様は 宮廷内でのお噂を
わたくしは 薄暗い路地の噂話を
金貸の弱みを 掴んでやろうと

その頃サロン内では 偽の儲け話に持ちきりで
勿論 皆様表立っての口は慎まれ
しかし その噂話は國中駆け巡っておりました

異国の外交官様の聞いたお話では 必ずと言っていい程
あの金貸の影が 顔を出すのでございます
「なんならわしが 金を用立てましょうか」と

詐欺師は用心深く 人前には 滅多に姿を現さず
金貸と詐欺師がつるんでいるなど
誰一人 勘ぐるものなどおりませんでした

異国の外交官様は 決心なされました
その詐欺師と接触を試みたのでございます
自らがおとりとなって

はかばかと削られて行くお嬢様の日々に
使用人達が多く去ってしまった中
わたくしは なんとか時間をつくって

金貸の家や 酒場を張りこみ
出入りする者達 言葉を交わす者達を
見張ったのでございます

そして 遂に聞いたのです 酒場で話二人を
間違いありません あれは詐欺師です
外交官様も確認なさいましたから

わたくしが聞いた話はこうでございます
先ずは 偽の儲け話を持ちかけて
初めのうちは 配当を渡すのです

配当は 騙した人々のお金と金貸のお金で用立てて
投資家は もっと利益を得ようと 更に借金までして
勿論 それは あの金貸がお金を貸すのでございますが

詐欺師は 頃合いを見て姿をくらまし
金貸は その借金の法外の利子を得て
更に 騙したお金を山分けにしようと

人をお疑いなることを知らぬお嬢様です
世に それ程までの悪人がいようとは
想像すらできないご様子で

しかし わたくし達からすれば
寧ろ 極悪人であってくれることが好都合
法が裁いてくれましょう

異国の外交官様は 気の許せるお役人様に
詐欺師と金貸の悪事を打ち明けて
後は取り押さえる機会を待つまでに

そんなこととは 当の本人達は知りません
益々大胆に 詐欺師は悪事を働き
遂に 国のお金にまで目をつけたのでございます

いいえ 伯爵様の入れ知恵でございましょう
偽の儲け話を流したのも 金貸を紹介したのも
手引きをしたのは みんな伯爵様

伯爵様は 噂を上手に操って
政敵であらした大臣様を嵌めたのでございます
遂に その気にさせるのに成功したのでございます

お嬢様の絶望的なお心に
一筋の希望の光が射して
やっと救われた 喜びましたものを

神様は 手ぬるいのです
いいえ 悪魔が それ程巧妙なのです
どうしても お嬢様を苦しませようと

もう少しのところでございましたものを
ああ 異国の外交官様 誰の差し金でしょうや
あらぬ嫌疑がかかったのでございます

金貸の悪事を探っていたことが
密偵と疑われてしまったのです
そうとなると 一刻の猶予もございません

お二人は ある決心をなさいました
ええ お二人にございます
お嬢様と 異国の外交官様と

闇に紛れて 国境を越えられようと
捕まってしようものなら どんな目にあわされましょう
そのお命とて ご無事でいられましょうや

それは晴れがましい夜でございました

お嬢様は闇の外套に身を包まれて 包む くるむ

その時を待ったのでございます

ああ 何時もでしたら

奥様は 何時もでしたら

闇に怯えて床に潜っただけでしたものを

奥様のお心は自分への悔恨と お嬢様への謝罪で

支離滅裂な無茶苦茶状態でございました

何時も 何かに恐ろしいまでに脅えてらして

猟奇的な 動物的な鋭い勘が働いたのでしょうか

何かが 何時もとは違う

そう察しられたのでしょうか

奥様にもはや理性はなく

衝動だけが 身体をめぐって

まるで猛獣のごとき 獣と化したのでございます

ええ 奥様が

こともあろうに 奥様が

異国の外交官様を 刺してしまわれた

お嬢様はただ無心に輝く月を見つめられ

これからの未来を夢見ていたことでしょう

異国の外交官様がお迎えに上がるのを待ちわびて

お嬢様は ただならぬもの音に

部屋から降りて来られましたが

何とかお部屋にお戻り頂いたのです

奥様のご容態が そう 発作を起こされたと

それから 外交官様は遅れるとの知らせがあったと

どうして あの様な惨事を お見せできましようや

わたくしは 外交官様を中庭に寝かせました

ええ 真っ赤な血を拭き取って

御者には 駄賃を渡して帰らせて

奥様は 奥様は もはや

奥様は 完全におかしくなられてしまったのです

自分が 誰かさえも分からない程に

ただ 「悪魔だ悪魔だ」と怒鳴り散らして
「退治しなくては」と 手足を大きくばたつかせ
抑えるわたくしと下男を跳ね飛ばす程の勢いで

耳をお澄ましになって待ちわびるお嬢様に
異常なまでの奥様の容態を
流石に隠し果せる筈もなく

勿論 お心のお優しいお嬢様です
ご両親思いのお嬢様です
奥様のご容態に 愕然としたご様子で

例え その場に 異国の外交官様がいらしたとて
お嬢様は 決して行かれようとはなさいませまい
暴れ狂う奥様を お一人 置き去りにして

とても お歳を召されたご婦人の力とは思えぬほどに
お嬢様は 睡眠薬を 奥様にお飲ませになりました
そして しばらく 皆でそのお身体を抑えつけ

眠りにつかれたのは 外が白々とした頃でした
それから わたくしは急いで中庭に参りました
異国の外交官様の元へ

外交官様は 既に冷たくなっておられ
わたくしは そのお身体を 庭に埋めたのでございます
このわたくしが この手で 外交官様を

お嬢様の張りつめた思いは
庭の小鳥が 小石を突ついたのさえ
わかる程に 敏感に

しかし いくら待てども
彼のお方は おいではならないのです
彼のお方は もはや土の中

わたくしは お医者様を呼びに出掛け
道中 少年に出会ったと 嘘を申し上げました
外交官様の言付を頼まれたと 勿忘草を手渡して

異国の外交官様は やむにやまれず
迫りくる追手を逃れて
お屋敷には伺わず 国境を越えられたと

お嬢様は その勿忘草を胸に 泣き崩れられ
されど 本当のことが言えましようや
当の奥様は うつつと眠り込むばかり

例え 目覚められたとて その目は虚ろで
果たして ご自分のなされた事が分かりましようや
意識も お身体も すっかり衰弱なされてしまわれて

涙で溺れそうなお嬢様を
わたくしは どう お慰めしたら
哀しみに溺れそうなそのお心を

悪魔は 何処まで苦しめる気なのでしょう
神様は 何故に救っては下さらないのでしょうか
わたくしは 一体誰に縋ればいいのか

奥様の混沌とした意識の中で 金貸がやって来ました
約束の日が来た
囚われもしないで のうのうとやって来たのです

神様がいたら ほんの些細な慰めです
金貸は 奥様の灯はあと僅か
そう お医者様から聞き出すと帰って行きました

あの歯っ欠けた口に 厭らしい笑みを浮かべて
「婆さんが死ぬまで待ってやろう
せめてもの情けだ」と 恩を売るかのように

金貸は どうして捕まらないのでしょうか
何時になったら 捕まるのでしょうか
他にお嬢様をお救いする手段はないというのに

涙で濡れた重い睫毛を持ち上げて
お嬢様は やっとのこと微笑まれました
全てを観念した 哀しい夜にございます

奥様が 目をお開けになられたのです
穏やかな澄んだ瞳をしておいででした
下男には 司祭様を呼びに向かわせました

ああ それは夢見る少女の様に 嬉しそうに
「ねえ 皆でインドへ行きましょうよ
きっと 素敵よ」

奥様は少女の頃 インドでお暮らしでいらしたので
「うちに帰りたいわ ここは嫌いだわ
ねえ あの人も そうよ あの人も連れて」と仰られて

遠くを望んで わたくしが目に入ったのでしょうかね
「お前も連れて行ってあげるわ」
楽しそうにそう仰られると お嬢様の手を更に握り締め

「ごめんね ゾフィ
きっと 今度こそ いい母親になれるわ」と
静かに目を閉じられ 永遠の眠りにつかれました

ドレスが余ってしまう程
すっかりやせ細ってしまわれたお嬢様
そのお姿に 心痛まぬ者がおりましようや

なのに 金貸は 死神のごとく聞きつけて
直ぐに お葬式を手配したのです
奥様は 感傷に浸る間もなく土の中へ

お葬儀は とても寂しいものでした
お嬢様に わたくしと下男 そして金貸にその下男
いいえ もう一人 そうです あの方が

執事が 遠く離れた所から
ああ わたくしは 目を疑いました
あれが あの執事をされたお方かと

一糸乱れず几帳面に分けられた髪は ぐちゃぐちゃで
きりっとした面立ちは 無償ひげを生やし青白く
隙のない服装は よれよれとしてだらしく

とても同じ人物とは思えないご様子で
しかし 確かに執事をされていたお方でした
何があのお方をそれ程まで変えてしまったのでしょうか

凍てつく表情のお嬢様が すくいあげた土が
寂しく ばらばらと 奥様の棺にかかりました
お嬢様は 今にも壊れておしまいな氷細工のよう

はらはらとかかる土に 金貸は 凄まじい形相で
なんと 抱える薔薇の花束をぶちまけたのです
棺いっぱい 深紅の薔薇が散りました

そして 狂ったように土を被せ 下男に代わると
あの厭らしい目つきで お嬢様を見たのです
余りの無礼さに わたくしは怒りで爆発しそうで

その視線を 遮ってやりました
金貸のお嬢様に向ける視線は びりびりとした鞆のよう
わたくしができる 精一杯の抵抗にございます

そんな時に ふっと その視線が消えたのでございます
射すような金貸の視線が 逸れたのでございます
一人の男が 金貸の元に寄り添ってくるじゃありませんか

この男は 金貸の手下でした
わたくしは びんときたのでございます
そして 耳をすませたのでございます

小刻みに震えるお嬢様のお身体は
まるで 今にも砕けそう
奥様覆う土に融けて

お嬢様の無念を感じながら
これを逃しては これが最後の機会かもしれない
そう覚悟を決めて 二人の会話を聞いたのです

ええ そうでございます
確かに あの詐欺師との悪巧みの話にございます
夕方 例の酒場で落ち合おうと

金貸は 奥様の埋葬の途中に急いで帰って行きました
明日 迎えに来るから用意しておけと
更に ああ 思い出しても寒気がします

「明日からはわしがとことん可愛がってやろう
いいか 一晩だろうが 三晩だろうが寝かせぬぞ」
満面に笑みを浮かべ だらしない口で唾を飛ばしながら

「お前は わしのもんだ
わしが 買ったのだ」と
大声を上げて あの悪魔は 去って行ったのです

お嬢様は 立ってはおられず
その場に 崩れてしまわれました
しかし そのお顔には表情がなく

奥様の眠る土を見つめられ
いいえ 何も見てはおられなかったのでしょう
お心を 奥様に預けておしまいになって

そんなご様子のお嬢様に 吸い寄せられるよう
執事がふらつく足取りで 近寄って来たのでございます
そして 途端 その頭を盛り土に押し付けました

「申し訳ございません 申し訳ございません」
と 何度も繰り返し そして お嬢様の足に伏して
泣きながら 申したのでございます

「わたくしのせいです わたくしの
悪い心を持ったせいで
一番大切なお方を こんなむごい目に」

執事は 赦しを請いに来たのでございます
呵責の念にとり憑かれ 身も心もぼろぼろにして
奪った財産は全てお返しますと

虚ろなお嬢様は ただ呆然となさって
嘗ての執事を 見たのでございます
そして 優しく その手をお取りになられました

「もはや財産など 何の意味がありましょう」
そうお嬢様は眩かれて
執事の顔は もう目も当てられない程の惨めさで

「いいえ いいえ いけません そっくりそのまま
わたくしは 上げまいさえ手を付けてはおりません
手を付けることができなかつたのでございます」

「ならば こう致しましょう
退職金として あなた達で分けておくれ
そうすれば あの者の手に渡らずにすみますもの」

お嬢様は そう仰られましたが
執事は 絶対受け取れぬと言い撥ねて
下男もわたくしも お断りはしたのですが

結局 奪い取った財産は 下男とわたくしとに
その日のうちに手続きがなされたのでございます
執事は ほとなされたご様子で

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

「いいえ 修道女様
執事は 今度は とても思い詰めたご様子で
帰って行かれたのでございます」

わたしは ただただ目を丸くして
「わたくしは それが気になって
だって こう言って帰ったのでございますよ

『このままでは 旦那さまにも奥様にも
申し訳なく 顔向けができません
何としても……』と」

尚も続く話に こともあろうことか わたしは
わくわくとした気持ちで 聞き入ってしまったのです
まるで 小説や物語を聞くように

果たして こんなことが世の中にあるものか
たかだか一介の使用人ごときが

あのような大きな事件に関わっていたなんて

しかし 彼の女性は 到底嘘を言う人物には思えず
されど やはり その話は信じ難く
わたしは ただただ 混乱するばかりでした



精も根も尽き果てておしまいなお嬢様は
頼れるお方も 誰一人となく
傷心の為 倒れられてしまわれました

そこに 嘗ての下女の一人が訃報を聞きつけ
お屋敷に お悔やみに参りました
わたくしは その者にお嬢様を託して

ええ そうです
わたくしには やるべきことがありましたから
わたくしの 人生最大の大勝負でございます

わたくしは 以前 異国の外交官様より
自分にもしものことがあった時には
例のお役人様を頼るよう申し付かっておりましたので

直ぐに わたくしは そのお役人様の所へ向かい
こっそり 悪党どもの密会を 通報したのでございます
ええ こっそりと 誰にも見られぬように

こんな端なわたくしを 信じて下さるやどうか
しかし お役人様は数人の部下を連れ
例の酒場に向かってくださったのでございます

きっ お嬢様が目覚められた時には
一片の雲もない 晴れやかな青空が
淀みを散らす 爽やかな風が

そう信じて わたくしは酒場に
後ろには 数人の人の気配を感じながら
手には お買い物かごを引き下げて

日が傾きかけの 夕刻前
まだ開店するには少し早い時刻でございます
店主が木戸を開け準備の最中ではございました

わたくしは 卵売りの振りをして
思い切って 店の中に入って参りました
勿論 断られるのは覚悟の上でございます

そうでなくては困ります
卵など持ってはおりませんから
外より見えた人影の確認でございます

直ぐに 追い出されましたが
ええ おりました ちゃんこの目で
金貸と 詐欺師と そして手下の男です

夜が 来る前に
闇が お嬢様を飲み込む前に
全てを終わりにしなくては

そう思い 店を出たのでございますが
一番最初に目に入って来たのは
こともあろうに 執事でございました

執事が 無表情に顔を強張らせて
懐に 手を射しこんで
いえ そこには何か そう 何か

ぶるぶると小刻みに震え 一步一步
酒場の入口へと 近づいて来たのでございます
わたくしのことなど 気に留めるでもなく

それは 何も見えてないご様子で
ただ 一つのことだけを思って
懐の手が 徐々に引き出されていきました

わたくしは すれ違いざま
咄嗟に もう一方の腕を掴みました
この期に及んで 邪魔をされては困りますもの

ここで全てを 終わらせなければ
すっかり 諦めてしまわれたお嬢様
絶望の闇に 飲み込まれてしまわれる前に

「旦那さん 卵はいらんかね」
そう言って わたくしは 執事の前に憚って
執事は 驚き 立ちつくし

わたくしは お役人様へ目配せをいたしました
中に 悪党どもがいる合図でございます
すると お役人様達が 一斉に踏み込んで

こうして やっと念願かなって
悪党どもは捕らえられたのでございます
いえ 一人 手下が逃げて行きましたが

執事は その騒動に すっかり動揺し
わたくしは 下女であることを打ち明け
ことの次第を説明したのでございます

しかし 執事は 安堵した風ではございましたが
「わたしは 何と役立たずなのだ」と
寂しげに 去って行きました

空が 紅色に染まっておりました
嘗ての お嬢様の頬のよう
きっと 取り戻してくれましょう

空に 一番星が大きく瞬きました
嘗ての お嬢様の瞳のよう
きっと 取り戻してくれましょう

これで 奥様の亡くなられた哀しみのみに
奥様の去られた寂しさのみに
お嬢様は 心置きなく泣けましょう

わたくしは パンとトマトを買いました
そして チーズとソーセージを買いました
お買い物かごに入れて

そして わたくしは歌を聞いたのです
ああ あの娘の歌
死にかけてジブシー女が 亡くなったのです

そして 橋では 大勢の人達で騒がしく
「誰かが 川に落ちて流された」と
ああ それは あの執事でございました

大きな試練が去ったと言うのに

多くの人々は去ってしまわれました

哀しみの夜に お嬢様一人お残しになって

悪魔は去ったのです

いいえ やはり神様は 手ぬるいのです

それだけ悪魔はしぶといのです

詐欺師は 処刑されました

しかし 金貸は 牢屋に入れられただけ

たった10年

申し渡された罪は

法外な利子で貸し付けをした罪

たったこれだけの罪でございます

お金持ちの方々は口をお閉ざしになられ

誰も訴える者がいなかったのでございます

皆様 恥だと思われて

伯爵様が 手をお回しになられたのです

またしても 伯爵様が

不当な利子さえ そのままで

10年という歳月は 何を齎すのでしょうか

お嬢様にとっ 短いものです

しかし 金貸には長いのでしょうか

いいえ されど 希望は最後まで捨てません

金貸は すっかりな年寄です

10年という歳月は どう響くのでしょうか

お屋敷も 工場や会社の権利も そのままで

元の生活に戻りは致しましたが

借金に法外な利子は そのまま残り

獄中から 金貸が手紙をよこしたのでございます

出所した暁には 全て貰い受けると

お嬢様の資産全部に そして お嬢様を

いいえ 10年の歳月が助けてくれましょう

金貸は 身体が弱っておりましたもの

きっと きっと そう きっと

わたくしは そう願いながら

お庭に 勿忘草を植えました

異国の外交官様がお眠りになる 土の上に

厳しい冬を耐え忍び 春が来るように

お嬢様の面差が 少しずつ 和らいで

凍てついたお心も 融けて行かれました

以前の穏やかな暮らしが 戻ってきたのです

しかし お嬢様は哀しみのみに身を置いて

寂しさのみに 身を置いて

静かなお屋敷に 暗色のドレスが揺れるのです

亡くなられた方々の思い出を探して

面影を追って 衣擦れの音が響くのです

喪が すっかり明けたというのに
お嬢様は まだお若いというのに
思い出だけに 身を置いて

お天気の日には 戸と言う戸 窓と言う窓
全部開け放って お日さまの光を入れるのです
お屋敷中に 爽やかな風を引き込むのです

そして どこもお花で飾るのです
お嬢様には 花の冠を
中庭に咲 花々で

空は 青く澄み渡り
庭に 勿忘草が咲き誇り
浅黄色のお嬢様の瞳に映る頃

お日さまが お嬢様を 誘ったのです
折角可憐な花に生れてきたのに
そのまま枯れてしまうのは 悲しいことと

礼拝に向かう時だけ開かれる門をくぐられて
深く被ったお帽子のベールをお下げになって
馬車をお呼びになって お出かけになられたのです

何年ぶりでのことでしょう
お嬢様が 自らお出かけになられましたのは
それは 何処とはなく ただ 街を巡りに

突然の突風が 問うたのです
折角生きているあなたなのに
ただ 死ぬのを待つだけなのですかと

そして 凄い勢いで吹きぬけて
屈む二人の子供を 震えさせたでございます
貧しさ故に震える子供をですよ

哀しみは 吹き去ったのでございます
お嬢様を苦しめてきたもの もろとも
風が 吹き払ったのでございます

小さな足が滑るように台をお降りになられ
貧しさに震える二人の子供の方に歩まれて
わたくしが その後につきました

ああ 忘れも致しません あの視線
野良の様な 凄んだ目つき
それは 姉の方でございます

「なんだお前 黒いくせして
そんな綺麗な格好しやがって！」と
わたくしに向かって怒鳴ったのでございます

わたくしはよいのです 慣れておりますから
されど お嬢様が 大層驚かれ
姉の頬をお抓りになったのでございます

わたくしは そのことに驚かされました
「悪いお口ね このお口
このお口がいけないのだわ」と仰って

お日さまが 微笑まれたのです
お嬢様が閉めてしまわれたお心を
お日さまが 開け放ったのでございます

「わたくしの大事な人に なんて失礼な
誤ってちょうだいな」
威勢のよいお声で

女の子は それでも我を張って
なんと わたくしにかかってきたのです
お嬢様は その子を抱え込まれ

本気ではないのです
振りかかってきた拳は とても弱々しく
その子は お嬢様の腕の中で大泣をきして

懐かしい光景でございます
昔 奥様がお嬢様をそうお叱りになられた時の
女の子は お鼻の頭を真っ赤にして

その姉弟は孤児で 別々の奉公にやられることに
まだ 年端もいかない子供なのに
どうにもならない身の上を 恨んでいたのをごさいます

無心にしがみつく小さな腕に
お嬢様は 何を思い出されたのでしょうか
柔らかに匂う 懐かしい香り

「ごめんなさい」と その子はしゃくりながら
わたくしに謝ってくれたのをごさいます
わたくしに このわたくしにですよ

そして お嬢様は 静かなお声で
「いけないのは このお口ね」と
今度は 優しく頬を摘まれました

「さあ お乗りなさい」
姉の方は観念したように馬車に乗り
しかし 弟の方はむつっとして

警戒しているのをごさいます
大人を この人は味方なのかどうかを
それ程 辛い思いをしたのでしょうか

お嬢様が 男の子をお抱えになると
男の子は 素直に身を委ね
着く頃には お嬢様の腕の中で ぐっすり

悪魔は ひたひたとやってくるというのに
神様は 思えがけなくいらっしゃるのですね
お嬢様に 温もりが蘇ってらっしゃいました

鎮まりかえていたお屋敷は
信じられない程 賑やかに
お花で飾らなくとも 華やかに

お嬢様は お二人を引き取られたのをごさいます
奉公先と世話人には 違約金と礼金をお渡しし
ご自分のお子様のごとき ご養育なされたのです

そして新たな使用人も お雇いになりました
料理人と下女の夫婦でございます
お屋敷は 益々 活気づいてきたのでございます

お二人を ご立派な学校にお通わせになられ
出来る限り ご自分の手をおかけになって
多くの時間を 共に過ごされました

男の子は やんちゃで利発なお坊ちゃまに
女の子は 礼儀正しい可憐なお嬢ちゃまに
そして お嬢様は 優しく見守る母のよう

日々は過ぎてゆきました
煌めく水面の流 取り留めがない様に
お嬢様は 振り返る暇などない程に

枝のように痩せておしまいな腰は 肉付きよく
青ざめておしまいなお肌は 赤みを帯び
お嬢様は 健康的になられました

もはや 甘い言葉の囁きも
心時めかす熱い視線も
お嬢様に 注がれることはございませんが

それ以上に 可愛いらしいお言葉に
心くすぐる悪戯っぽい眼差しに
お嬢様のお心は 高鳴っておいででした

もはや 豪華なお花の花束も
高価な煌びやかな贈り物も
お嬢様に 届くことはございませんが

お二人が 摘んでいらした野の花に
お嬢様に縋る思いに
お嬢様のお心は 満たされておいででした

@@@@@@@@@@@@@@@@@
彼の女性は 遠く懐かしむように
幸福なお暮らしを 思い出して
しかし ふっと 表情を曇らせました

「わたくしが やはり 悪いのです
わたくしの悪い心が 引き起こしたのでございましょう
この悪い心が 悪魔を 引き入れたでございます」

彼の女性は 悲しげに視線を落として
「愚かな思いつきで 旦那様をあのような目に
それから 悪魔がお屋敷に居座ったのでございます」

そうかもしれない 彼の女性が 悔やむように
不幸の元は ほんの些細なことなのだろう
何度も 改める機会があったはずであろうに

「修道女様 わたくしは どうにもしようがないのです
わたくしは 人を 見殺しにしたのでございます
一人は異国の外交官様 一人は執事 そして・・・」

何も知らぬ間に 悪魔はひたひたと忍び込み
小さな仕返しを手助けする振りをして
心までも 乗っ取ってしまうのだろう

今思い起すと 悔いいるばかり
異国の外交官様は 息があったとしたら
確認しないまま 野ざらしにして

どうして あの様に振舞えてのでしょうか
まだ暖かい血を 拭き取って
まだ暖かい 彼のお方を追いやるなんて

他の方法が あったのではと
ひょっとしたら まだ 生きていらしたとしたら
そうであるなら お救いできたのやもしれません

ああ そうであるなら そうであるなら
そうであるならと 悔いいるばかり
わたくしは なんと惨い女なのでしょう

厄介物のごとく ほっぼり出して
冷たくなられるまで ほっぼらかして
どんなにお寂しい思いをなされたことでしょう

なのに わたくしは 深く深く 穴を掘り
真っ暗な孤独の闇に 突き落としたのでございます
せめてもと 勿忘草を慰みに

今思い起すと 悔いいるばかり
流れ行く執事の骸を
ただ 眺めて見送るなんて

どうして 抱き起してさし上げなかったでしょう
川岸に駆け下りて 声をおかけしたのなら
手を 差し伸べてさしあげたなら

遠く 川下までも流されて
何処の誰かも 知られずに
一人ぼっちに 流されて

手掛かりは 肌身離さず持たれていたのでしょう
お嬢様から差し出された文にございます
とても大切に 懐奥にしまいこんで

最後の言葉が気にかかります
役立たず者と項垂れられて
去る 寂しい後ろ姿

何を思って 流されたのでしょうか
どんな思いで 流されたのでしょうか
遂には何にもわかりません

今思い起しても 苦しいのです
まだ 息があるのとないのとで
意識があるのと途絶えたのとで

一体 狭間はどこなのでしょう
生きていることと 死との狭間は
一体 何が 違うのでしょうか

人々は 何を思うのでしょうか
その消えゆく瞬間の中で
人々は 何を 求めるのでしょうか

わたしに 何が できるのでしょうか
最後のその時を
わたくしが このわたしが 一体 何を・・・

運命の力に 刃向えとでも
全ての人の苦痛を 取り払えとでも
ないものを あるようにしろとでも

このわたくしに たかが人に使えるだけの身にですよ
絶望に砕かれた心を 再び 蘇らせられるとでも
消えかかった命を 再び 燃え上がらせられるとでも

今思い起す程に 苦しいのです
あの瞳が 視線が
責められているようで

これほどまでに 苦しむのなら
何故 あの時
いいえ これがわたくしの本性なのでしょう

これほどまでに 苦しむことが
そう あの時
ええ これがわたくしへの罰なのです

驕ったわたくしへの 罰なのです
何もしなかったわたくしへの 罰なのです
見捨ててしまった 罰なのです

きっと あれは 導かれたのでございましょう
悪党どもが捕らえられた夕刻の
有頂天な帰り道での帰宅途中

川沿いに広がる原っぱに
色とりどりに集う家馬車にテント
覆う ジプシーの調べ

今更ながら 悔いるのです
あの差し出された手に
あの縫る瞳に

ずっと待ちわびていたかのように
わたくしに向かって
最後の力を 振絞って

どうして せめて傍に依り添って
優しい言葉を かけてやらなかったのでしょうか
いいえ 抱きしめてあげたなら

なのに わたくしは
怖かったのですございます
あの娘の瞳が いえ 思いが

何故に 出向いてしまったのでしょうか
快活に刻む拍子の中の 物悲しいメロディー
魅せられる 不思議な旋律

家馬車を溢れ囲む仲間達が見守る
何故に あすこに あの人が
何故に わたくしは 逃げたのでしょうか

今更ながらに 請うのです
どうか許してくださいと
わたくしのこの醜い心を

あの死にかけたジプシー女は 死んだのです
わたくしが衣装を買った あの娘にございます
貧しき中でも 最も貧しい 哀れな娘

薄れる意識の中で 何を思ったのでしょうか
消え行く最後の瞬間を
後ずさりする わたくしの姿を追って

子供が 歌を歌っておりました
あの娘の幼い弟妹でしょうか
死のうとする姉の枕元で

どうして あの娘が死にかけてたなんて
どんな思いで 服を売ったのかなんて
どうしてわたくしに分かるのでしょうか

わたくしにとっては 誰でもよかったです
ただ 身を変える衣装が欲しかっただけなのです
ありったけのお金も ただの気紛れなのでございます

『魅惑の声で 歌うわ 愛の歌

踊るわたしに 男達はみんな夢中
微笑むのは あなたにだけよ
熱い視線で 誘ってあげる

選んであげたの わたしがあなたを
愛されている振り してあげたのよ
ただの気まぐれなんかじゃなかったけれど

行ってよ それ程の価値もありゃしない

こんなわたしは どうしろと
誰が 救ってくれるとも
いつでも あたしは 純粋なのに
誰か 愛してくれるとも

聖母がわたしに微笑まれたの
病めるわたしを抱きかかえ
凍える身体を包みこみ
そして 愛を下された

わたしにあるのは 着古しの着物だけ
どうか せめて 収めて下さい
売ったお金で パンを買おう
幼い弟妹に パンを買おう』

今でもあの歌が責めるのです
どうして去ってしまったの と
こんなに焦れて待っていたのに と

確かに わたくしは あの娘を抱きかかえ
だって 汚い路地裏に倒れていたのですよ
いいえ 投げ捨てられていたのですよ

肉がすっかり削げ落ちて
浅黒い肌が 青黒く 所々どす黒く
とても 生きた人間とは思えないほどに

どうして見捨てておけましょう
朝晩は 冷えるでしょうに
薄い衣は 裾が解れて 擦り切れて

そのまま 放っておいてでもしたのなら
あの娘の命は 明日と持たなかったでしょうに
わたくしは 服を取り換えてやりました

場末の路地裏に相応しいよう
持っている服のうちで 一番着古したものを
それでも あの娘にしたら上等な物でしょう

今では ただ 申し訳なく思うのです
同じように 浅黒い肌
同じように 黒髪の 黒い瞳

わたくしと その娘と 何に違いがあるのでしょうか
わたくしは 運よくお嬢様に拾われて
あの時 捨てられていたのなら

あのまま 享樂に身を落して
夜の世界をさ迷い歩いた あのままで
あの時 あの人にお会いしなかったのなら

いいえ わたくしは 恨んでおりました
奴隸の身分の子どもに生れたことを
どうして わたくしの肌は黒いのかと

同じ頃 若旦那様にもお嬢様がお生まれになりました
もしも ちょっとでも違っていれば
わたくしは あの お嬢様だったかもしれないのにと

母屋での煌びやかな生活を羨んで
一方で ジプシー女を憐れんでいたのです
本当の自分は あちら側 お屋敷の人間なのだと

今になって思うのです
もっと してあげればよかったと
もっと 何か あの娘の為に

ただ ただ 悲しいのでございます
あの娘が 死んでしまったことが
たった一人のあの娘を 喪ったことが

どうにも 思いを捨てきれず
抑えることが できなくなって
わたくしは 再び 出かけたのでございます

しかし そこには もうなにも
幼い弟妹達も 誰も
跡形もなく 消えておりました

あの娘の寝かされていた家馬車も
ほっぽり出して逃げたお買い物かごも
一切合財 消えたのです

微かに聞こえる彼らの歌が
快活に刻む拍子に 哀愁帯びた旋律は
遂には 遠くに 消えたのです

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

「ああ 修道女様 修道女様
わたくしは 充分苦しんでおります
後悔しております」

彼の女性は 可哀そうな程の呵責で
その整った顔立ちが 惨めなまでに歪んでしまいました
「あの娘は わたくしの何でありましょうや」

堪らずわたしが 彼の女性の肩に手を置くと
「あたたこうございますね」と
わしの手を自分の両手で包み 苦しそうに吐きました

「一体 わたくしは 何者なのでしょう
あの娘は わたくしにとって 何なのでしょう
あの娘と わたくしと 何が違うのでしょうか

どうして これ程までに哀しいのでしょうか
どうして 今に至るまで苦しみ続けるのでしょうか
何故だか どうしても 後悔してしまうのです

もしも あの娘の死を知らずにいれたなら
もしも わたくしが白人であったとしたら
きっと 全く気にも留めなかったことでしょう」

司祭様は遥かに思慮深く 静かに言葉をかけられました
「偽ってはいけない
ここは主の御前だ 装ってはいけない」

彼の女性は 身をびくとさせました
「主の御言葉を知っているのであろう

既に 違うかね」

「はい いいえ 違うのです

わたくしは 確かに よきサマリア人のごとく
そうです あの娘に情けをかけました

しかし 違うのです 確かに心配で
行き交う人々に 娘を知っている人はいないかと
すると 誰かが連れて来てくれたのです

仲間でしょうか ジプシー男があなを担ぎあげ
わたくしは 咄嗟に 物陰に身を隠し
あなは 微かな意識で言ったのです

『見て この服 ねえ お金よ
聖母さまが下さったの
ねえ あたし達の聖母さまよ』と」

そう言うとき わたしの手を放りだして
やや狼狽ぎみに 司祭様の方へとその手を突き出し
それでも司祭様は 落ち着き払ったご様子で

「白人の基督教徒達は 見捨てたのです
路上で行き倒れの哀れな娘を
それを わたくしが助けたのでございますよ」

それは突然火がついたかのように
今まで 物静かな口調が 一変して
静かだった部屋に 彼の女性の声が響きました

「わたくしは とてもよい気分になったのです
とても よいことをしたような よい気分
ええ 白人たちを負かしたような

だって わたくしが聖母さまだなんて
この奴隷上がりのわたくしがですよ
王女様以上の それ以上の」

当時のわたしは 全く理解できずにいました
どうして突然と 圧倒されるばかりで

何が何だか ただ驚くばかりで

そうかと思うと 今度は涙声で
「そうです そうなのです
わたくしは そんな人間なのでございます」

「よい気になって 得々となって
わたくしは 驕った人間なのです
さもない人間なのです

もしもわたくしが白人であったなら
きっと あんな娘なんか見捨てたでしょうよ」
「やめなさい もうおやめなさい」

「自分よりずっと惨めだから 助けてやったのです」
「いい加減にするのです」
司祭様は 尚も高ぶる彼の女性を制しました

司祭様の刺すような叱責が
しかし その瞳は深く穏やかで
決して 腹を立ててる風ではありませんでした

「自分を蔑むのは もう おやめなさい
お前は充分分かったはずだ
人を生かしているのは 何であるかを」

彼の女性は 泣くじゃくりました
まるで 小さな子供のように
無垢な涙を たくさん流して

「お前の中の主の御言葉を その所業を
自らを持って 否定してはいけない」
司祭様の声は 至って穏やかでした

「躊躇うことなどなにもない
お前の中の 主の御言葉に
ただ 従えばよいのだから」

「お嬢様の言葉で よくわかったのでございます
こんなわたくしを 『大切な人』と

仰って下さった お嬢様のお言葉で」

「お前の大切な方の『大切な人』なのだから
お前が たとえ何者であろうと
やはり その娘に 愛を持って応えたいだろう」

「わたくしは 誰にも勝ってなんかいないのです
まして お嬢様には及びもしない
あのお方こそ 真心の人なのでございます」

司祭様が 諭されました
彼の女性の中の 苦しみを
今なら それが理解できます

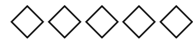
何故に 彼の女性は逃げたのか
差し出す娘の思いを振り切って
どうして 逃げてしまったのかを

そして 今思っても 恥じるのです
当時のわたしを あの時のわたしを
決めつけてしまっていた わたしを

彼の女性は 既に主の御言葉を知っていたのです
彼の女性の生きる中に 自分のうちに
なのに何故 だから一層 何故と

一体 彼の女性の何を裁くと言うのか
いいえ 彼の女性は罪人には違いはないのです
だったら何が 彼の女性を罪びとにしたのか

そして また 別の疑問がありました
しかし それは 司祭様の手前
わたしは その質問を呑み込みました



お嬢様を取り巻く 幸せな日々が
あっという間に過ぎて行きました
お嬢ちゃまもお坊ちゃま大きくなられて

お嬢様は もういい年なのだから
『お嬢様』はやめるようにと仰って
『奥様』とお呼びするよう言いつかりましたが

しかし わたくしには やはりお嬢様はお嬢様
年をおとりになろうが 家の主になられようが
初々しい頃のお嬢様 そのままなのです

確かに 奥様となられたお嬢様は
頼もしくおなりになりました
お守りする方々がおできになって

お嬢様 お引き取りになられた姉でございますが
見違えるほどに変身なされ
まるで 若い頃のお嬢様（奥様）を見ているよう

栗色の髪をカールして 頬を薔薇色に染めて
嘗ての阿婆擦れかけた娘は
愛らしい淑女にお育ちになられたのです

勿論 ただ幸せだけではなく
奥様となられて 一層 背負う物が多くなられ
大変ではございましたが

小さかった坊ちゃまは 奥様の背を越えるまでに
益々年老いた下男に変わって
力仕事をされるほど 遅しくなられました

ええ やんちゃではございましたが
学校での成績も 大変よろしく
奥様は 大層期待されておいででした

そうなので う 奥様が
絶望に身を置いていた あの嬢様が
夢をお持ちになられたのです

お坊ちゃまの成長するにつれて
旦那様の会社を継がせたいと
できれば ご自分の養子になさって

しかし そこには 辛い現実が
もしも養子になされたのなら
あの金貸の法外な借金までも背負わすことに

二人のお子様の親代わりとして
奥様は 立派に果たしておいででしたが
人々の視線は 厳しゅうございました

あの金貸が 怒鳴りこんで来てというもの
いつも 人々は 遠巻きにして何うように
中には『金貸の妾』と 罵る者さえおりました

しかし 奥様はご立派でございます
大奥様を お亡くしになられた当初は
人目を避けるご様子ではございましたが

二人のお子様をお迎えになられてからは
どこへ行かれるのにも 堂々となされ
その風格に 誰も何も言えなくなったのでございます

そのような頃に 奥様はさるお方を頼られたのです
とてもお懐かしいお方でございます
昔 奥様の家庭教師をなされたお方でございます

お坊ちゃまの家庭教師を頼まれたのです
何の躊躇いがございましょう
お坊ちゃまの将来に勝る物などないのですから

奥様のお心を占めているのは
常に二人のお子様と
あの憎たらしい金貸のこと

お坊ちゃまには 高い学問を身に着けになって
どんな状況でも 生きていけるように
できることなら 会社の経営をと

そう 奥様はお考えになられたのです
それで 古い伝手を頼りになさって
勿論 嘗ての家庭教師様は 承諾下さいました

それは とても 懐かしく あの時のごとく
初めてお嬢様の前にいらした頃が思い出されます
当時は大学の講師をなされ なかなかの美男子で

お嬢様の前では 何時も頬を赤らめては
決して目をお合わせになさろうとはされずに
何とも純真で 知性溢れるお方でした

あの時のまんま そっくり
奥様の前ではお顔を赤らめられて
父君様そっくりの ご息様

二人もお子様の義母様をされたとして
奥様は まだまだ 充分お美しく
若者にとっては 眩しくお映りのことでしょう

まるで 奥様に一目お会いすることがお目当てで
お坊ちゃまの家庭教師は よい口実とばかりに
とは言え はにかむご様子に お顔の火照りようったら

そんなご様子に お嬢様はややおご不満気味に
ご用もないのに おめかしをして
若き家庭教師様の前を 行ったり来たり

家庭教師様は 御父君様似のなかなかの美男子
髪は麻栗色で 瞳は森のように深く
既に大学は御卒業され 更にその上に進まれて

全てに於いて 微笑ましく
また 懐かしく
お屋敷を 彩ってまいりました

奥様は 予感しておいででした
年上の貴婦人に対する恋心は
いずれは 若い淑女へと向かうであろうことを

それにつけても 10年という時間は
奥様のお心を 辛く 締め付けになられ
いいえ まだ まだ あと何年と

奥様は 焦っておいででした
どうか 二人のお子様に災いがふりかからぬよう
どうか この幸せが続くようにと

そんな最中がございます
年老いた下男が ついには動けなくなったのです
お優しい奥様は 下男の為に床をお設えになられ

下男は元より天涯孤独でございましたから
一番辛い時期を 共に越えてきたのです
放り出すわけには参りませんでしょう

ええ そうです そうなのです
庭の勿忘草の秘密を 知っているのです
勿論 口の堅い者でございましたから

二人のお子様まで 何かと面倒を見ておあげになって
下男は 感謝のうちに亡くなったのでございます
奥様から頂いた財産全てを返上して

これは 神様のお計らいでしょうか
奥様の人徳によるものでしょうか
少なからずも 希望とはあるものなのです

奥様は 下男から返された財産を
お坊ちゃまに継がせたのでございます
これらの財産は 抵当には入っておりませんから

この期にと わたくしも頂いた財産全てを
奥様にお返しすると申し出たのでございますが
それには及ばぬと突き返されました

あの金貸が戻ってきて奥様が
ああ 考えたくはございませんが
その時 お前はどのようなと

一文なしで追い出されるこの身を
奥様は心配して下さって
受け取っては頂けませんでした

わたくしは 田舎のお屋敷と農園を
いずれは 人の為に使おうと心に決めて
奥様の言いつけに従うことに致しました

奥様が 最もご心配されたのが
お嬢様の身でございます
どうか 金貸の目に晒さないようにと

何を言い出すか分かったものじゃございません
借金のかたに売られた娘達は数知れず
何とかして お嬢様を手の届かない所へと

しかし 恋と言うのは気まぐれで
焦れるほどの種火が 何時 飛んできたのか
何時の間に 燃えあがってしまったのか

気をもんでいらした奥様なんてどこ吹く風で
元より恋しく思っていたら家庭教師様が
遂に 健気なお嬢様の虜となられたのです

当然のことでございます
奥様がお育でになられたお嬢様ですもの
まだ幼さが残るものの 益々お綺麗になられて

ええ それでも 依然として
憧れの君は奥様 永遠に奥様
相変わらず お顔を赤くなさられて

なるべきことがなるように
奥様の思いが 当然のことであるように
幸せは形となって

しかし その一方で ある噂が
それは ともておぞましく
そして 到底 信じ難く

あの金貸が 牢屋から出てくるかもしれないと
何処からともなく 噂が流れたのでございます
あと2年 まだ2年もあると言うのに

どんな手を使ったのでしょうか
誰の手引きでしょうかね
皇太子様のご成婚の恩赦にございます

国は お祝いで華やいでいると言うのに
奥様は 地獄にでも叩き落されたかのよう
夜も寝ていられない程 頭をお悩ましになられて

お考えの末 お二人をお託しなる決心をなさいました
その一人は 嘗ての家庭教師様
もう一方は 会社をお任せになっている方に

それからというもの 慌ただしく
奥様には うかうかなんてしてる暇などなく
方々に思いめぐらしたのございます

嘗ての家庭教師様は 今では立派な学者様
大学のご教授をされておいでです
とても信用厚く 尊敬に値するお方にございます

まずは お嬢様とご息様とのご結婚をと
奥様は おまとめになられたのです
そして お坊ちゃまの後見人をもお頼みになられ

また 会社の責任者には お坊ちゃまの将来を
大学卒業の後は 立派な経営者に仕込んで欲しいと
この方もご誠実で 勿論 信用に値されるお方です

奥様は お嬢様の婚礼をお急ぎになられ
お坊ちゃまを 他県にある由緒有る学校へ編入なさり
一切の関係を断とうとなさったのでございます

どんなにお辛い思いでいらしたことでしょうね
充分な準備も お別れもそこそこに
慌ただしく お屋敷を追い出すようになされて

見るからにもお辛そうで
奥様は 心労の為でありましょうか
すっかり体調をお崩しになりました

今 思い返してもお気の毒でなりません
お嬢様のご婚礼にさえ 出席をご辞退なされ
ご婚礼後は お屋敷の出入りを禁じられたのです

どんなに酷なことでしょう
お嬢様の晴れがましいお姿さえも
カーテン越しに見送られて

身体は大きくなったとはえいえ
まだ 道理が理解おできにならないお坊ちゃまは
納得できずに 寮には入らぬと癩癩を起されて

本当であったなら お二人とも
お屋敷のお子様として 堂々と送り出されたものを
奥様は 身を切る思いで 断ったのでございます

今でもあの時の光景は 忘れることができません
お坊ちゃまの 捨てられた子の寂しい目を
いつかは きっと ご理解頂けると信じて

おめでたいご祝賀であるはずの日は
奥様にとっては 残酷な日でもありました
その日が 刻々と 日を刻んで

街は とても賑わっておりました
街並みは 艶やかな色で飾られて
本来であれば 大びらにお祝いしたいものを

遂に 金貸の使いが参ったのです
皇太子様のご婚礼の晴れがましい日に
あの金貸が 牢屋を出ると

奥様は 立っていることさえお辛いようで
遂には その場に倒れ込んでしまわれました
それは 今までも見たことない程のお苦しみようで

使いには 奥様のご体調が宜しくない旨
くれぐれも伝える様にと歸して
お医者様に来て頂いたのでございます

それから その金貸でございますが
獄中で身体を壊したらしく 出所後は暫く静養すると
使いをやるのでそれまで待っているようにと

金貸は 充分な年寄です
その恩赦も 老人への考慮もありましょう
それなのに 奥様は ああ

以前より 薄々は気が付いてはおりました
奥様はお腹の痛みを召しておいでで
時より辛そうに されど何事もないよう装われ

事を急がれたのは そのせいもあつてのことでしょう
あの金貸よりも 絶対 長生きして見せる
全ての権利を取り戻す と仰っておいででしたものを

奥様を蝕むご病気は 既に重いものとなっておいでで
金貸が出所した頃には 起きているのがお辛いご様子
それでも 金貸よりは長く生きて見せると仰って

わたくしは 金貸が釈放されるというその日
様子を見に出かけたのでございます
お薬を頂きに上がる用事もございましたので

わたくしが 奥様のお薬を頂き 表へ出たところ
丁度 食堂の前に馬車が止まって
中から 金貸が降りて来たのでございます

ええ 確かに 更に年をとって
それでも 相変わらずの厭らしさ
奥様を思うと 憎たらしくてなりません

その足取りは ふらついており
神経質に痩せた身体は 益々細く
結構な衰弱ぶりでした

そうであるのに 口はいたって達者で
何か言い争っていたのでしょうか 声を張り上げ
中から別の男の人が 宥める様に出て参りました

今でもはっきりと覚えております
あの言葉に どれ程の衝撃を受けたでしょう
わたくしは 息が止まりそうになったほど

「喜べお前に嫁を買ってやったぞ
わしはもうこの身体だ お前に譲ろうってんだ
なあに 無駄口はいらぬ 凄い別嬪さんじゃぞ」

奥様のことです
割れ鐘のような大きな声で 恥ずることもなく
品のない笑い声を上げて 大はしゃぎして

一体 どう言うことなのでしょう
何という言われようでしょう
一体 奥様を何だと思っているのでしょうか

わたくしは 直ぐにでも飛び出して
あの覚束ない足を けっ飛ばしてやろうかと
いいえ ぐっと我慢をして

ふらつく金貸を支えながら その男の人が言ったのです
「いいですか伯父さん 僕は許可しません
そなこと 人は物じゃありませんよ」

金貸は 例の如く唾をまき散らして
「お前は まじめ過ぎていかん
一目見れば その考えも変わろうぞ」と

わたくしは もう一人の顔を見たくなくて
どうしても 奥様のお相手とされよう人の
金貸に顔を見られぬように用心をして

ああ それはあの人 いえ その人は
初めて甥と 知ったのでございます
金貸の甥を その・・・奥様のお相手と

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

あの時彼の女性は一瞬 言葉を詰まらせました
視線は伏せ目がちで 躊躇うような
あまりそのことには触れたくないような そんな様子で

それは 単に 強欲な老人への嫌悪だと思いました
わたしも評判は聞いていましたから
実際 会ったことはないのですが

神に使えるこの身でさえも
あの老人に対する感情は 決してよいものではなく
いいえ わたしも 悪魔の如く敵視さえしていたのです

それは 悲しい思いをさせられた人々を知っていたから
わたしは 沢山の涙を見てきたから
あの老人によって破滅させられた人々の

あの老人には お金しかない
悪魔に魂を売り渡し 愛も涙もない
そんな個人的な怒りさえ 沸き立ってきて

わたしは 自分の立場をすっかり忘れ
またしても 彼の女性の本質を見ずに
物語を 追ってしまっていたのです



奥様に どうお伝えしたらいいものか
お顔は青白く 血の気もなく
長い睫毛を静かに閉じになられて

わたくしは 金貸の様子のみをお伝え致しました
一段と歳をとり 身体はよぼよぼ
一人でまともに立ってはいられない程だと

「そう だったらわたくしの勝ちだわね
もしもわたくしに触れようとするのなら
突き飛ばしてやりましょう」

そう仰られて 奥様は力なく微笑まれて
安心したように 静かに目を閉じられたのです
どうして あんな残酷なことが言えましょう

金貸は 今度は甥を使って
奥様の財産を そして 奥様のお命を
もろとも 奪い取ろうとしているだなんて

お可哀そうな奥様
しかし でも あの甥は
ああ どうして金貸の甥なのでしょう

二人のお子様がお屋敷を去られて
お屋敷は すっかり静まり返り
奥様は 抜け殻のよう

心をお懸けになるお相手も
手を懸けになるお相手もなく
寂しさを紛らわすこともできずに

忙しさに我をお忘れになることも
楽しさに時をお忘れになることもなく
ご病気の辛さに耐えて

そんな中 金貸の使いがやって参りました
出所から数日のことです
静養にいくので奥様も同行するようにと

とんでもないことです
奥様のお身体では 長旅は耐えられようもなく
使いには 高いお熱で行けぬと言って帰りました

再度 出発の前日まで 使いは来ましたが
その都度 あれやこれやと帰し
遂には 金貸は 奥様の同行なしで出立いたしました

実際 奥様は 益々体調をお崩しになられ
日に日に 目に見えるほどに 弱られて
身体を横たえている時間が長くなりました

それに引き換え 金貸は
使いの話ですと 日に日に元気を取り戻し
今では しっかりとした足取りであると

ええ 確かに 身体の衰えはありましたが
出所時 弱気であった心持は 元に戻って
今では言いたい放題 とんだ傍若無人ぶりと

静養には 金貸の甥も同行するとのことで
そこで 奥様に惹き合わせるつもりだったのでしょう
一か月は ゆっくりしてくるつもりだと

一生 帰って来なければいいのに
そう わたくしは思って
いえ 本気にそう願ったのでございます

奥様と お子様たちとの楽しいご旅行を
奥様のお生れお育ちになったお屋敷での休暇を
思い出しながら そう願ったのでございます

ついこの間のことです
燦々と降り注ぐ太陽の下で
奥様とお子様たちがお過ごしになられたのは

懐かしい田舎のお屋敷で
昔の思い出に 新しい思い出を重ねられたのは
それは もう 健康そのもののお姿で

ぐったりと横たわる首筋は 何ともお辛そうで
せめて 思い出の中に
輝かしく 美しい 思い出の中に

奥様は よく 少女の頃の昔話をしておいででした
二人のお子様との思い出に 蓋をするように
どんどん押し寄せてくる痛みから 逃げるように

「ねえ 覚えていて
お母様がお前に布を巻きつけてたわね
とても綺麗な色だったわ 長い一枚の布よ」

それは わたくしが初潮を迎えた時のことです
「とても綺麗だったわ お伽噺のお姫様のようで」
大奥様が わたくしの為に 特別に誂えて下さったのです

奥様のお話は わたくしの歴史でもございます
奥様と 大奥様と そして わたくしと
暖かな日溜まりような思い出です

大奥様は よく インドの話をして下さいました
お小さい頃を お過ごしになられた地でございます
そして わたくしの母の故郷の地でもございます

おかしなものがございます
当のわたくしは 故郷の地を知らぬと言うのに
異国のお方の思い出話で 知るなんて

大奥様は 時折 わたくしに母のこともお話下さいました
そして 奥様は 時折 思い出されて
お祖母様はどんな方と わたくしにお尋ねになるのです

わたくしとて幼く 怖かったとしか覚えてはおりませんが
母からは 進歩的で豪傑な方と聞かされておりました
売られそうな母を保護し解放して下さったのですから

下女としてではございますが
職も頂き 所有物の身から解放して下さったのです
母もわたくしも 大変な恩義があるのですございます

奥様の昔話を聞いていると
色々なことが 思い出されるのです
様々な思いが 込み上げてくるのです

どうして わたくしが呼び寄せられたのか
どうして これほどまでに大切に下さったのか
わたくしは 常日頃 考えているのです

どうして 大奥様は彼の地を懐かしむのでしょうか
どうして それも 最も輝かしい思い出として
母にとっては 忌まわしい地であると言うのに

人の中には わたくしを遠巻きで伺う者がおります
中には蔑みの目で わたくしは罵倒されたりもします
汚らわしい物の如く 突き飛ばされもします

わたくしは 忌むべき物なのでしょうか
わたくしは 愛されてよい者なのでしょうか
それでもわたくしは 彼の地に焦れるのでございます

そして どうしようもなく愛しくなるのです
愛しくて 愛しくてたまらないのです
あのお屋敷の方々が ああ わたくしのお嬢様が

奥様の浅黄色の瞳が 微動だもなさらずに
時に甘えるよう 傍にいるよう強請るのです
わたくしの姿を その瞳にお映しになって

「知っていて わたくしはお前が羨ましいの
漆のように 底から輝く黒髪が
彫刻のように くっきりとした面立ちが」

奥様が そんなことを 安易に仰られるのは
現実をお知りにならないからです
そして「お前は恋いをしたことがあって」と

わたくしは ああ そんなこと 考えたことさえも
本当にございます そんなようなことは
かけられる言葉は 何時も罵りです

いいえ 嘘です 『何時も』とは嘘です
また 装ってしまいました 司祭様
わたくしが そう 思っているだけなのです

自分は 愛されるはずがないと
このお屋敷の方々が 特別なのだと
人に愛される理由が わたくしの何処にあるのかと

すっかり節が出てしまわれた 奥様の細い指が
時折 わたくしの黒髪を 撫でるのです
懐かしそうに 遥か遠くを恋うって

「過ぎてしまった思い出だわ」と
切なそうに 恋うのです
身も心も焦がした日々を思って

ああ ひょっとしたら もしかしたら
いえ されど あのお人なら
奥様を お幸せにして下るかもしれない

瞳の奥から湧いて出る慈しみ深い優しさ
礼儀正しいお振舞いに 知的な眼差し
決して美男子ではないけれど紳士的な佇まい

いいえ 所詮は金貸の甥です
ひくつかせた あの神経質そうな眉ったら
赤みがかった縮れた毛も そっくり

ああ どうか 何処ぞの何方か
奥様を救って下さいと 切に願うのです
苦しみを 孤独を 取り去ってくださるのなら

思い出は 何処へでも 何処の時にも
戻ることが できるというのに
時は止めることができないのでございます

思い出の奥様は 何時に於いても眩いのに
病気は 奥様を時間を追って責め立てるのです
手を抜くことなく 昨日よりも今日 更に悪く

痛みどめのお薬をお飲みになる回数が増え
お薬をお飲みになる時間が短くなられ
もはや 痛みがあるのが当たり前のごとくに

昼夜問わずに その激しい痛みは襲ってきては
理性を奪い 遂に その辛さに耐えかねて
奥様は わたくしに 懇願なされたのでございます

「ああ わたくしをひとおもいに刺しておくれ
この苦しみを終わらせておくれ」
そう仰られ わたくしにしがみ付くのでございます

お身体は 針金のように寝れられているというのに
その腕は必死で わたくしの肉に食い込まんばかりに
鬼気迫るその形相は まるで野獣の如く

勿論 そのようなことができませんや
わたくしが 奥様を殺めるなどとは
ああ なんと恐ろしいこと

痛みに耐える奥様を 見ていることの辛いこと
病気のせいで 骨が突き出てしまったそのお身体
日に日に 衰えられるそのお姿

そんな地獄のような毎日に 事件は起きたのでございます
奥様が 遂に自ら ご自分の身体に向かって
短刀を突きたてようとなされたのです

わたくしが 目を外したほんの僅かな隙に
あわやというところのことでした
それでも 制すわたくしから 短刀を奪おうとなさって

いいえ もはや 刺す程のお力などはありませんものを
「お願いよ お願い 見逃して
もう 終わらせたいの」 と仰って

奥様は 痛みもさることながら
お薬の副作用にも 悩まされておいででした
お身体が異常に震えたり 幻覚に襲われたりと

ああ いっそ 奥様をとさえ
変わるようもなら 変わって差し上げたい
健康な自分が 恨めしく思えます

奥様は 泣きじゃくられながら
まるで小さな子供のように
わたくしの胸に 顔を埋められ

「わたくしは 自分が分からなくなるの
お願い 自分が自分でいられうちに」
何度も 何度も 殺してくれと頼まれるのです

確かに 奥様は 限界かと
すっかり衰えられたそのご容姿のみならず
精神に於いても 限界かと

わたくしは わたくしの一存で
料理人と下女の夫婦に暇を出したのでございます
奥様には申上げましたが 判断に於いてはもう

誰にも 見られてくなかったのでございます
奥様の醜態を 疲れ果てたそのご様子を
誰にも 知られたくはなかったのでございます

ある麗らかな日でございました
その日は 奥様のご気分も不思議とよろしく
お身体を 少し起こされるほど

お庭には 勿忘草が見事に咲き誇り
わたくしは 奥様にお見せしようと摘んで
奥様は 嬉しそうに眺めて仰ったのです

「わたくしが死んだら あの方の隣に埋めて
庭に咲く 勿忘草の花の床に」と
突然のことで わたくしは 息が止まるかと

「お前には 世話をかけてばかりだわね
わたくし 知っていたの
黙っていて ごめんなさいね」

何故 何故 と わたくしの心は叫びました
「あの方は亡くなられたの わたくしの腕の中で
追ってに刺されたと そう仰って」

ええ そうです わたくしは見なかったのでございます
大奥様が 異国の外交官様をお刺しになるところを
彼のお方を貫いた刃物が 何であるかを

奥様は 摘んで来た勿忘草を愛おしそうに
「どうして 勿忘草だったのでしょうかね」
と 若い頃の初恋に微笑まれ

「どんな美しい花よりも どんな豪華な花束よりも
なんて素敵なのかしら」
と しみじみと眺めておいででした

本当に どうして と思うのです
どうして 彼のお方なのでしょうかと
奥様に確かめる手立てはもうございませんが

奥様なら いくらでも お相手なら
別のお方であったなら 異国の外交官様ではなく他の
大奥様も むきにならずにお許しになったかもしれません

今頃は ご病気にかかれることもなく
素敵な旦那様 可愛いお子様達 多くの人に囲まれて
お幸せに お暮らしになっていたに違いありませんのに

お金で 身を買われることもなく
金貸の妾 と言われることもなく
残念で 悔しくて 勿忘草が憎らしくさえ

どんだん食の細くなられる奥様は
殆ど 召し上がることはできずに
お薬をお飲みになるのがやっと

お医者様の往診も 一週間に一度が
三日に一度となり 遂には日に一度に
会いたい人がおありなら お会わせするようにと

そんなご様子を 何処かでお耳にされたのでしょうか
お嬢様が 度々 お越しになられました
しかし 奥様は 会わぬと仰られ

散々お断りをした末のことでした
お嬢様は 他の県の大学から旦那様にお呼びがかかり
明日 この地を立たねばならぬと打ち明けられ

わたくしは この期を逃してしまおうものなら
お二人は 二度とお会いすることはできなくなると
そう思って 言いつけを破ってお通したのでございます

お坊ちゃまには 散々 考えました
しかし 奥様が 頑なに拒否をなされて
お見せしたくなかったのでしょうか 病に果てたお姿を

お嬢様と 面会をなさって
暫くは 嘘のように元気になられ
とは言っても 気分のことですが

やはり お食事は 臭いさえも嫌がられ
お医者様が 遂に 仰られたのです
そろそろ覚悟をしておくようにと

丁度 お医者様がお帰りになるところのこと
金貸の使いがやって来たのでございます
名を言ったので お医者様は誰の使いか聞いたでしょう

お医者様を お見送りして
使いが言うには 金貸は 静養所で風邪をひいて
拗らせてしまったので 帰りはもう少し遅くなると

その時 わたくしはすっかり忘れておりました
約束の一月が経ったのだということを
この世の中に金貸が存在していたのだ ということを

奥様とてそうです
それどころか 意識のないことが多くなられ
それなのに 金貸を見ずにすむ嬉しさが勝って

なんていうことを わたくしはしたのでしょうか
まどろんでいらした奥様の意識を
敢えて 我に返えすようなことを

奥様は 金貸の言葉を思い出されて
微かにさえも残されていないお力で
わたくしに迫ったのでございます

「嫌よ こんな姿 晒すのなんて
お願い 早く わたくしを」
と 重さに負けそうな腕で短刀を引き出され

そうです 非情な金貸のことです
どんな言葉を奥様に吐き捨てるのやら
晒したくない 金貸なんかに いえ 誰にも

多くの方々の憧れの人であったお方が
痛みのおせいで年寄りも遥かに老けてしまわれ
否応なしに わたくしの心に残酷に迫るのです

奥様は 流れない涙で泣かれ
拒むわたくしに 無理矢理短刀を押し付け
そして わたくしに身体全体で押し掛け

もう これ以上
苦しむ奥様を 見ていられない
壊れていかれる奥様を もう これ以上は

そんな強い思いが 沸き立って
ああ ここでそのまま 力を入れれば
ええ そうすれば 奥様は

しかし いいえ わたくしは
やはり できませんでした
奥様を 殺すなどとは

いいえ 最早 奥様はそうなさらずとも
ぐったりとなられ 意識をなくされ
倒れてしまわれました

その後 暫くして お医者様がいらっしゃいました
が 奥様はいないと申し上げたのでございます
金貸が来て 無理矢理連れて行ったと

お医者様にはどう思われたか 信じて頂けたのか
その後も 何度かいらして
しかし そのうち お姿がみえなくなりました

奥様は そのまま
目を お開けすることもなく
眠るように お亡くなりになりました

わたくしは 誰にも知らせることなく
心配でいらしたお医者様にさえ 嘘をつき通し
奥様が生きてるかのようには謀ったのです

奥様は すっかり息をするのをやめてしまわれ
わたくしは 奥様のお召替えをいたしました
あの日 着て去るはずだった あのドレスを

真新しい下着をお付けになって
お顔のよく映える空色のドレスをお召になって
上等なレースがあしらわれた物でございます

そして お言葉通り 彼のお方のお隣に
お庭の勿忘草の咲床に
十字架を胸に お嬢様を埋めたのでございます

去った風は 一片の花弁のことなど 忘れてしまい
降った雨は 一株の花など すっかり忘れて
川の水は 一輪の花さえ 覚えてなんていないでしょう

@@@@@@@@@@@@@@@@

「やがて 一切 屋敷を訪ねる者はいなくなり
世間からは忘れられておりましたのに」
辺りには 何とも言えない静寂だけが漂いました

「終わりましたか」

「はい これが全てでございます

後は 皆様がお知りになる通り」

医者 は 令嬢は金貸が連れて行ったと聞かされ
その後も様子が気になり 何度か出向いたものの
令嬢の病状を聞かされ 後は託して行かなくなったと

しかし 通報したのはこの医者でした
金貸が 医者 の元に怒鳴りこんで来たのです
勝手に嫁を療養所にいれたと 大暴れをして

それは 彼の女性が金貸についた嘘です
医者 の指示で 令嬢は療養所に入れられたと
長い留守をした金貸は そう聞かされ逆上したのです

唯一事情を知っているのは彼の女性だけ
厳しい聴取を受けても口を閉ざしたっきり
皆が 令嬢を殺して財産を奪ったと囁かれる中で

◇◇◇◇◇ 10 ◇◇◇◇◇

「今の告白に 嘘偽りはありませんね」
司祭様が 静かではあるが鋭い口調で言うと
「はい 神に誓って」と 彼の女性が答えました

彼の女性は なんと清々しい様子にも見えました
全てを吐き出すことができ
主への信心に 何の曇りもないような

主への宣言の言葉が 響きました
まるで美しい歌を聞いているかのように
わたしの心を魅了しました

一連の流れが まるで芸術の如く
わたしの心を感動で溢れさせ
滴る雫さえ神々しく 洗礼の儀式は終わりました

彼の女性は 決して降伏したのではないと
自ら湧きたつ情熱のうちから 主の御心を受け入れ
心の奥の底より帰依したのだと確信しています

賜った名によっ 彼の女性は生まれ変わったのです
卑屈な思いで身を欺いてきた一人の女は
もはや 欺くことはもうしないであろうと

「安心なさい 我々が今聞いた告白を
他に漏らすことなど 断じてないと」
彼の女性は 意外な表情を浮かべました

「だから いいね
お前は 問われるままに答えねばならない
今 話をしたこと全てを」

「話をせよと？」

一体 何をですか」

彼の女性は 不安気な表情を浮かべました

「お前の大切な人は 未だ 土の中

寒くて 孤独な土の中なのだから」

孤独という言葉に 不満げに異議を唱えようと

しかし 司祭様は口を挿ませようとはさせませんでした

「いいかね 令嬢も 異国の方も

主の恵みに与れず 迷うっておられるのだよ」

そして 念を押す様に厳しく言ったのです

「何処に令嬢を埋めたのか

取り調べで ありのままを話すのだ」

まるで残酷な宣告をされたかのように

彼の女性は 項垂れました

それは わたしにとっては意外でした

わたしはと言えば ほっとしたのですが

彼の女性は 誰一人として 殺してなどいない

何一つとして 奪い取ってはいないのだと

確かに 全くの無実ではないにしろ

全く 法を犯してはいないとは言わないが

少なくとも 世間の言うほどの凶悪犯ではないのです

わたしは 彼の女性の告白を聞いて

その告白を 全て 話せば

人々はきっと分かってくれると思いました

絶対に 極刑はまのがれるだろう

中には 同情すらする者がいるかもしれない

自分の行いを反省する者もいるかもしれないと

いいえ 寧ろわたしは 話してくれとさえ

そう せつに願ったのです

理不尽な世を正す為にも

しかし 彼の女性は 話しませんでした
令嬢を埋めた場所については喋りましたが
細部に至っては 依然として 口を閉ざしたのです

何故でしょう 何故自ら不利になるようなことを
わたしには どうしても理解できませんでした
一体 何を考えているのでしょうか

「わたくしは これでいいのです
主が全てご存知です それでいいのです」
と 静かに微笑んでさえみせたのです

また 不思議に思っていたことについて質問しました
わたしが司祭様の手前 飲んだ疑問ですが
どうして 今まで 洗礼を受けなかったのかと

幼い頃より 厳格な家庭に使い
主の御言葉にも 当然 触れ親しみ
そればかりか 行いまでしているにも関わらずに

当の彼の女性は 「怖かったのです」と
怯える様に そう言ったのです
わたしは 予想だもしない返答に戸惑いました

彼の女性のことを思うと 後悔ばかりです
例え若かったとはいえ
今であったなら 今のわたしなら

そう思うと自分を責めずにはいられなくなるのです
これは わたしの過ちなのです
例え 同じ結果であったとしてもです

『怖い』とは 一体何を恐れていたのか
どうして 事情を話すことを拒んだのか
わたしは 分からないでいたのだから

告白後も 何度か 彼の女性を訪れ
弁護士とも 一度か二度ほど すれ違いました
神経質そうな眉毛の 赤毛の男です

その頃には わたしは すっかり忘れていたのです
彼の女性の時折見せる 躊躇い について
正に 未熟であったとしかありません

弁護士は あの悪名高い金貸の甥でした
それが一層 わたしの目を曇らせたのです
それは 抱いてはならない『偏見』です

どうして この男は弁護を引き受けたのか
その思いだけで 頭が一杯になったのです
そんなことは 本来 問題ではないのに

いいえ 問題であったのかもしれない
今思い返せば とても大切な
それは 寧ろ 彼の方の問題ではあったが

しかし わたしは 彼の抱える苦しみなど
当時のわたしは 一切 無視をして
あくまで『悪名高い金貸の甥』にこだわったのです

一体 何の得があるのだろうか
どんな下心があるのだろうか
ひょっとしたら 彼の女性の財産目当てかと

彼の女性の財産に於いても 嫌疑がかかっていました
不当に手に入れたものではないかと
彼の女性への疑惑は 益々 膨れあがっていたのです

嘗ての執事をたぶらかし 名義の変更をさせ
更に自分の名前に書き換えが成功すると
後は邪魔になって 橋から突き落として殺したと

わたしは 財産の全てを
書き換えられた物までも 我がものとする為
金貸が 甥を 使わしたのだと考えました

今思えば わたしも 噂を信じる群衆と
対して変わりはないのです
噂を嘘で膨らませ 言いふらす連中と

時が経つに連れ
身辺が明らかになるに連れ
彼の女性の罪が 疑惑と一緒に増えていきました

同じ登場人物 同じ証拠で
全く別の話が作り上げられていきました
彼の女性の告白とは まったく別の

わたしは ある疑いを持ったのです
若しかしたら ひょっとしたら あの告白は
全て 一部かもしれないが 筒抜けであったのではと

何故なら 既に事故と片づけた事件までも
あの伯爵の発砲事件についてですが
彼の女性の犯した罪として連れられてあったのです

明らかに 盗み聞きをされていたに違いない
そのことでわたしは ある確信を得ました
告白での伯爵に纏わる話の全ては 事実であると

それは 下女が日ごろ主人を恨み殺そうと企んでおり
伯爵を色仕掛けで誘惑し発砲するよう仕向けたのだと
「あすこに泥棒が潜んでいる」と耳元で囁いて

その事件は 人々に忘れていた記憶を呼び起こし
恥知ずな女好きと伯爵を晒すこととなりましたが
驚くことに 当時の証言は覆り新たな罪となったのです

確かに 告白でも それらしきことは言っていました
彼の女性が 自分から伯爵を誘惑しのだと
だからと 主人に対して殺意があったとは考え難い

わたしの頭は混乱しました 人が罪を作りあげるなど
それこそ 神に対する反逆ではないか
それでも 無情にも 罪は増えていったのです

これで彼の女性の罪は 主人殺しの企て 誘惑
財産の横領 元執事・令嬢の殺害
偽造 死体遺棄等となったのです

正義は 何処にあるのだろうか
誰も 可笑しいとは思わないのだろうか
意外にも 弁護士が無罪に対して意欲的でした

また 沈黙を貫いていた彼の女性でしたが
検察側の陳述に 激しく反論した場面がありました
それは 主人達の人柄に触れた所です

奴隷とし物の如く扱われ その不満から恨みを持ち
元より淫乱な性質で 性格も品行も悪く
主人や男達と淫らな行為を繰り返していたと

とんだ呆れた作り話です
彼の女性を 一目見て 話をしたことがある者なら
彼の女性が いかにか高い女性か分かるものを

当然ながら 彼の女性は 凛とした口調で反論しました
主人は世間に知れた人格者で 恨みなどなく
奥様もお嬢様も善い人物で とてもよくして頂いたと

確かに母は奴隷であったが 奴隷の身分から解放され
自分は お嬢様付きの女中として雇われた
ちゃんと お給金も休暇も頂いていたと

ざわついていた法廷は 一瞬 息を呑みました
彼の女性の清廉な態度が 他を圧倒したのです
が それは一瞬だけで また ざわつきが始まりました

何故なら 逆に質問を突き付けたからです
自分の様な女を 相手にする者などいるのか
女中の誘惑に 貴方方は簡単に乗るものなのかと

そして 恨みに関してはこうも述べました
あるとしたら 賤しい身分であることを恨んだ
それは 自分の愚かさから恨みを持ったのだと

恐らく 自分の愛すべきお屋敷の人々の名誉が
公然と侮辱されることに対し我慢ならず
どうにも黙っていられなくなったのでしょう

しかし 彼の女性の潔白さや 一連の流れは省かれ
『自分の処遇に愚かさから恨みを持った』
これだけが 記載されました

世間知らずのわたしでさえ あからさまに
この裁判が 悪意に満ちていることが分かりました
傍聴人達は 偏見と差別で曇っていたことでしょう

そんな中で無実を訴える弁護士を
何故だか わたしには 欺瞞ととったのです
一体 何を企んでいるのであろうかと

弁護士は 犯罪の幾つかを否定しました
先ずは主人の殺害を謀った件について
「何故その時に嘘の証言をしたのか」と問いました

検察側の証人伯爵は 恥になると思って隠していたと
ならばと 過去の証言について幾つか質問をしましたが
返答していくうちに どうにも怪しくなっていました

過去の事件を持ち出したことについては
誰の目に於いても 違和感を覚えたが
彼の女性のスキャンダラスな印象付けには役立ちました

次に 元執事殺人容疑についてですが
弁護士は ある男の存在を明かしました
その男とは 詐欺事件の一味です

執事を橋から突き落としたのは 正にその男だと
酒場で 詐欺師と悪巧みをしているところを見られ
通報された仕返しに 執事を殺ったのだと

その話は よく覚えていました
弁護士は その男の正体を明かさなかったが
ならばその男は 金貸の手下です

あの話は本当なのだと 改めて驚かされました
確かに 告白では 元執事は酒場の前に居りました
しかし そうであるなら とんだ災難です

弁護士は 過去の記録から目撃者の証言を見つけ提示し
突き落したのは男と記載されていたことを明らかにしたのです
また 彼の女性は別の場所に居たので不可能だとも言いました

弁護士は 更に 河上を少し行った原っぱで
そこで 彼の女性を見たときまで言ったのです
一瞬 わたしは耳を疑いました

当然 聴衆は互いの顔を見合せどよめきました
わたしは 告白を思い返してみました
元執事が 流されるほんの前の話です

そう 彼の女性はあのジプシー女の所に居たのです
ふっと 彼の女性の声が 表情が 鮮明に浮かびました
『何故に あすこに あの人が』と

弁護士は 人々を落ち着かせるように
その時の様子を 詳しく 話そうとしていました
わたしは 漠然と 彼の女性に目を向けました

彼の女性は 一瞬 目を見開いて弁護士を見ました
が それは一瞬のことで 即座に逸らし
大切なものを取られまいと抱える様に俯きました

一瞬ではあるが 彼の女性の瞳を見つめる弁護士に
その光景に わたしはある衝撃を受けました
その時は それが何であるかは分からずにいましたが

弁護士は その時の様子を傍聴人達に向けて話し出しました
「いいですかみなさん 僕は彼女を見たのです
ジプシーが滞在していた原っぱです」

彼の女性は ジプシー達に食べ物を施しに来たのだと
以前にも病で路上に倒れた仲間の娘を助けてやって
暖かい服と交換し あるだけのお金を施してやったと

わたしは 思わず十字を切りました
何とも言えない感動で 胸が溢れました
どうか 傍聴人達にも思いが伝わりますよう祈りました

「貴方達が見放した娘に 愛の手を差し伸べたのです
娘は 最後の最後まで 彼女の行為に感謝をし
そして祈ったのです 今一度 会えますように」

彼の女性は 自分に一斉に向けられた視線に慄き
隠れるようにして その身を縮こませたものの
弁護士はというと 尚も 朗々と話しました

「それは正に主の思し召しに違いない
彼女が この人が 現れたのです
最後のその時 沈まんとする日の光の中から」

その大袈裟な話しぶりに 検察側は唾然としたが
傍聴人の中には 涙を啜る婦人までいました
彼の女性はと言えば 気の毒な程にうろたえていました

「貧しき者に食べ物を与え 病める者に力を与え
彼女は 絶望に撃ち拉がれた中に射す光なのです
そんな人が 人を殺すことなどできようか」

感動は頂点に達し 婦人達は大粒の涙を流しました
そんな中で 嘘ではないかと声をはった者がいたが
その場に一緒に居たと言う医者が 証言をしました

弁護士は 彼の女性の日頃の勤務態度や
令嬢に対する献身的な看病についても
元の使用人に証言させました

今までの悪い印象を 払拭するかのよう
今度は 穏やかに 抑揚を交えながら話しました
それは優しく 一人一人の胸に残るように

人々は囁くのさえ止めて 皆 彼らの言葉に耳を傾け
まるで魔法でもかかたように
法廷の雰囲気は がらりと変わってしまいました

感動のあまり 中には彼の女性に同情する者が現れ
少なからず 悪女の印象は薄れてきた様に思えました

それなのに 彼の女性はすっかり動揺している様で

検察側は情勢を変える為 既に主治医が証言した
往診の際 嘘で追い帰したことを持ち出し
「令嬢を埋めた件はどう説明する」と言い放ちました

はたりと その言葉で聴衆達は一気に我に返りました
「被告は 令嬢を埋めたと自供している
では 誰が 令嬢を殺したのだ」

しかし 弁護士は落ち着き払って
「確かに 彼女は 被告 令嬢を埋めたと言った
だが 殺したとは言っていない」と

「だったら何故 医者や その……
『婚約者』かね に嘘を言ったりしたんだ
死んだ後もだ 死んでからも どうしてだね」

検事は やや興奮気味に強い口調で言いました
それでも 弁護士は 焦る様子など見せずに
敢えて ゆっくりとした口調で答えました

「思い出して下さい 主治医が証言で言ったことを
令嬢は 何時死んでも可笑しくない状態にあったと
それに 被告は献身的で 気の毒にさえ思ったと」

皆は 弁護士が何を言うかと固唾を呑みました
「令嬢の一番の気がかりは 引き取った子供達だ
彼らに 災いが降りかかることを最も恐れていた

令嬢は 膨大な借金を抱えていましたからね
もしも 死んだと分かればどうでしょう
その子達を取り立てたるんじゃないですか」

そして 弁護士は 一寸間を開け
「いいですか その債権者はあの金貸ですよ
ここいらで知らぬ者のいない あの強欲の」

数人の人が 気の毒そうに顔を顰めました
「下の子は その一部を相続している

間接的ではあるが しかも 違法にだ」

わたしは 恐ろしくなって十字を切りました
遂に 弁護士は本性を現したと
だが 睨んだ先の弁護士は 何故だか悲しげで

「彼女は 被告は 愛してたのです
子供達を そして 主人である令嬢を」
「つまり どうゆうことだね」

「生きてると装わねばならぬ理由があったのです
だが死体は腐る 故に やむを得ず埋めたのです
それは令嬢の強い意志でしょう」

法廷はざわつく中 弁護士は 一際通る声で訴えました
「愛しているからこそ とても 深く」
その言葉に その様子に わたしは打ちのめされました

同じ人物 同じ証拠 全く別の物語
しかし なんと言おうか
そこには 微塵も 悪意などはありませんでした

わたしの心は ひどく混乱しました
弁護士 いや 金貸の甥が
それこそが わたしの一番の過ちなのだが

彼の女性は この弁護士に話したのだろうか
いいえ 違う 何一つ話してなんかいやしない
しかし それにしてもよくもそこまで

彼の女性は 真っ青な表情を浮かべ
それは 放心状態で 今にも失神しそうなほどで
驚愕の眼差しで 弁護士を見ていました

最前列の若い婦人が 思わず顔を覆いました
きっと あの婦人が あの若い淑女に違いない
隣には 凄みを利かせて被告を睨む青年がいました

検察側が 彼の女性に対しての真意の確認を求めました
しかし 彼の女性には 何も耳に入っていない様子で

震えるばかりで とても返答できる状態ではありませんでした

@@@@@@@@@@@@@@@@

「疲れましたか 少し 休みますか」

「ええ でもいいのです バレンチノ神父」

一寸だけ ほんの少しだけ わたしは息をついた

「大丈夫です どうか 話させて下さい

お願いします 最後まで

そうでなくっちゃ困ります」

「そうですか 修道女ローザ」

「もしも 今 目を閉じてしまおうものなら

わたしは 二度と起きれないかもしれません」

見守る修道女達が 心配気にざわつくのを感じた

「最後まで話さずに どうして門を叩きましょう

わたしは 後悔のあまり迷ってしまいます」

わたしは 充分に分かりすぎるほど分かっていた

自分の寿命が 後僅かしかないことを

胸が重く 苦しくはあったが でも まだ

「わたしは さほど苦しくはないのです」

「ええ わたしはいますとも 修道女ローザ

ここにいて あなたの話しを聞きましょう」

◇◇◇◇◇ 1 1 ◇◇◇◇◇

どうか バレンチノ神父 愛する姉妹達よ
今から話すこと さっき話したこと
全て くれぐれも他言なさいませぬように

どうか 皆さん方 詮索して下さるな
余りにも有名な事件なので 察した者もおろうが
絶対に これらの人々の名前を言っては下さるな

特に 主の御前では
その名を 思っただけでも下さるな
愚かな年寄の願いです

これらの人々に 悪い影響が及びませぬよう
受けた神の裁きを 覆すことのありませぬよう
これらの人々が 彼の女性が 追放されませぬよう

そして どうか 疑いますな
特に 彼の女性の信仰を 神への誓いを
全ての責めは このわたしにあるのだから

どうか くれぐれもお願いします
彼の女性を追いやるなど あってはならぬことなのです
未熟な修道女が招いたことなのだから

弁護士の意外な証言で 法廷は動揺し

被告の容態を考量して裁判官は休憩をとりました

いいえ 話を擦り合わせる為です

彼の女性は 一端 被告台から連れて行かれ

その際 最前列の若き淑女は身を乗り出し

隣の青年は じっと睨んだまま 見送っていました

弁護士は思わずよろけた彼の女性に 手を差し出し

しかし彼の女性は その眼差しさえも振り切って

真っ直ぐに前を向いて 退出して行きました

弁護士はその姿を見送ると 椅子にへたり込み

左手で米神を強く押して がっくりと肩を落として

上目づかいに見上げた目は 気の毒にさえ見えました

一方傍聴席は 一気に 噂と憶測が溢れ出し

ひそひそ話がどんどん大きくなっていき

また言い争う者まで出てくるほどでした

自分達の思惑とは違う被告像に 戸惑っていたのです

以前から彼の女性を知る人も 知らない人も

何が罪であるのか 分からなくなってしまって

弁護士が 苛立つ様に席を立った途端

話題が 弁護士へと集中しました

有罪か無罪かなどは 二の次にして

あの弁護士は 何者か

何故 弁護を引き受けたのかと

人々の好奇心に 弁護士の素性が暴かれました

金貸の甥だと知れば 益々 湧きたち

どんな下心があつてかと 詮索が始まり

遂には 二人の間柄まで疑う始末

それが転じて 弁護士まで誘惑したのかなど
耳を覆いたくなるほどの下世話な話が
度を越えて 広まっていきました

勿論 そんな状態を 苦々しく思う人達もいて
それまでもが 彼の女性の罪とばかりに
全てが身分が賤しい所以と不快を表し

その一方で 彼の女性の善行を称賛したり
被告に不利になるよう仕組まれているのではと
あからさまに口に出す者もいました

市民達は 力を持ち 自分の頭で考え
自分達は何者であるかを考え始め
特権というものに 不審を抱いておりましたから

誰もが 薄々 いえ大ぴらに感じたのです
裏で伯爵が関わっていることを
そして この裁判に不当性への疑いを持ったのです

そうした中には被れ者という者達はいるもので
本質を理解できず 権威を負かすことに専念し
ただ闇雲に 彼の女性の無罪を訴える者もいました

また 若い婦人達は時代の流れに敏感で
第一の関心ごとは 自分達の地位の向上でしたが
できるだけ公正な視点で 罪状を批判したり

野心的な婦人は 自己啓発として
被告の身分であることや肌の色から
博愛精神の表現として 無罪を主張してもみせました

どうしてあの事件が 人々の注目を浴びたのか
それは 使用人の主人殺しという話題性もあったが
そうした人々の思惑もあってのことなのです

思いの他 休憩は延び
人々はだらけ初め
裁判には関係のない会話さえし始め

わたしはといえば 間を持て余し
というより 聞こえてくる会話に嫌気がさし
一端 部屋の外へ出ました

中は煩いだけではなく 人の熱気で空気も悪く
しかし 外でも溢れ出た人々でがやついていました
わたしはうんざりした気分で 更に 中庭に出ました

すると回廊の長椅子に 弁護士が居りました
米神を抑え しかし 何を思いたったのか
突然 請うように空を仰ぎ 十字を切ったのです

その時 何故でしょう
軽蔑していたはずの言葉が過ったのです
「弁護士は あの女に惚れたか？」と

我が身を疑いました
余りの汚らわしさに 身ぶるいさえ
急に 彼さえも汚らわしい者に見えたのです

裁判官達が出てくるのが見えました
それを 弁護士も見ていたのでしょうか
慌てて 彼は部屋へと戻りました

わたしは 足取りは重く 気が進まず
戻った時には 皆 自分の位置に着いており
始まりを告げる鐘が 鳴り渡りました

彼の女性が 看守に付き添われ
わたしの前を 通りました
顔を強張らせ しかし しっかりとした足取りで

そして 裁判長が咳払いをしたのを見計らって
検察側の論告が始まりました
それが終わると 弁護士が無実の弁論をしました

弁護士は 主人殺害の企ても
令嬢・元執事殺害についても
一環として 全てに於いて無実であると主張し

彼の女性の人間性を 基督教的な精神と賛美し
元執事殺害については 再調査を求め
また 令嬢の遺体の調査を要求しました

裁判官は ざわつき始めた人々を注意し
彼の女性に 何か言いたい事はないかと問うと
法廷は 水を打ったかのように鎮まりかえりました

彼の女性は 少し考えて
躊躇うように 話し始めました
それは弱々しい声で しかし とても通る声で

「わたくしが悪いことがあるというなら
一重に 愚かさ故にほかなりません
その愚かさが 悪魔を引き寄せたのです

旦那様のお嬢様に対する 父の愛を疑い
奥様のお嬢様に対する 母の寂しさを分からず
独りよがりな感情に溺れたからにございます

だから 悪魔につけ入られたのです
わたくしは 神の裁きを受けねばならないのです
わたくしが 全ての根源なのです」

裁判官が 到底理解できたとは思えず
恐らく ここに居る全ての人々 弁護士に至るまで
何を言わんとしていたのか 知る由もなかったでしょう

裁判官は 何うように確認しました
「ならば お前は如何なる裁きにも服するのだな」
「主のご意思とあらば」

弁護士は 異議を唱えようとしたが
裁判官の威圧的な視線に圧され 言葉を呑みこみました
「ならば 全てに同意するのだな」

それらには 『はい』とも『いいえ』とも言わず
「主が 全て ご存知です
わたくしは 主に全てを委ねます」と

彼の女性の あのゆったりとした声が
人々の心を酔わせ 涙までも誘いました
が 弁護士だけは鬱屈として 米神を抑えておりました

わたしはいえ 傍聴人の殆どが無罪を願いました
この目の前の信心深い婦人が 人を殺すなど
多くの人が そう確信したに違いありません

裁判官は 忌々しい様子で眉を顰め
しかし 人々を刺激するのは得策ではないと踏んだのか
早々に 審議に入りました

審議は あっという間に終わり
裁判官は 罪状について述べはじめました
幾らか検察側の陳述と違っているだけで ほぼ同じ

彼の女性については 品行方正な勤務態度も善行も
よいと思われる証言は採用されず
その代わり 淫らな表現は削除されました

元執事殺害事件に関しては 過去の調書を元に
元執事殺害は『疑い』に書き換えられ
再調査の約束がされました

主人殺害の陰謀や令嬢殺しについてはそのまま
確たる証拠がないことから あくまで憶測の域だと
取り合うどころか 採用されませんでした

彼の女性は また 同意を求められましたが
肯定も否定もせず 胸の前で手を合わせ 頭を垂れ
無言で 全てを受け止める覚悟を表しました

それから 彼の女性に判決が下れました
下されたのは 『死刑』です
瞬間 弁護士から全身の血が引いて行くのが分かりました

勿論 わたしとてそうです
彼の女性は 誰も殺してはいないのでから
わたしは 思わず叫びそうにさえなりました

実際 彼の女性の無罪を叫ぶ者がおりました
それは 数人ではなく かなりの声で
しかし 法廷は半ば強引に閉廷されました

人々の揚げる声の中 彼の女性は退出して行きました
その時 その声に紛れて青年の声が聞こえました
「僕は絶対 お前を許さないからな」と

彼の女性が 若い淑女と青年の前を通る時のことです
一瞬だけ 彼の女性は眉を寄せただけで
すかさず 隣の淑女が 押し殺した声を震わして

「お黙りなさい 黙るのです
お前は お義母様の最後をしらないから
何も知らないから そんなことが言えるのよ」と

やはり 二人は 引き取られた子供たちでした
姉は 自分達の存在を目立たせぬよう 弟を宥め
彼の女性の姿を見送ると 雑踏の中に消えて行きました

彼の女性の凜とした清い姿は 人々の心を打ち
その後も 彼の女性の無罪を訴える声は
止むどころか 大きくなっていきました

しかし 判定が覆ることはありませんでした
弁護士が証言した容疑者は捕まえられましたが
取り調べの最中に死んでしまったのです

供述する前のことです
伯爵が 関与してるに決まっています
喋られて一番困るのは 伯爵ですから

結局 元執事殺害も 容疑のままで
処刑の日が 刻一刻と 迫って行きました
わたしは 不当な裁判への腹立たしきで一杯でした

真実を知っているがこそ 怒りで一杯でした
真実を言えない自分が 悔しくもあり
また 彼の女性に対しては 申し訳なく思いました

しかし あの裁判は わたしが何を言おうが
民衆が どれ程束になろうが
既に 初めから『死刑』が決まっていたのです

せめて わたしにできることは何であろう
わたしは 修道女です
最後まで 彼の女性と供に居ようと

処刑のその瞬間まで より添うつもりで
わたしは その後も通いました
彼の女性の元を その日が来るまで

わたしは その時思ったのです
この婦人を前にして 主の御言葉を解くなんて
おこがましいとさえ思えました

ならばわたしは 友人の如く振舞おう
いいえ 彼の女性の良き友人になろう
そう決めたのです

それからは 他愛もない話です
例えば わたしの身の上話だとか
どうして 修道女の道を選んだかといった

何故だか 不思議と心が安らぐのです
死が 目を追って 迫っている人であるのに
彼の女性と話していると 全てが澄んで見えるのです

それが 彼の女性の魅力なのでしょう
その静かに響く声は まるで麻薬のよう
どうして女主人達に愛されたのか 伺えました

彼の女性を見ていると 御伽の国に迷ったかのよう
きっと 東洋の貴婦人とは こんな感じなのだ
エキゾチックな顔立ちが 想像を呼び起こすのです

こんな人が 本当に死んでしまうのだろうか
わたしは 裁判のことなど忘れてしまうほど
彼の女性に 魅了されてしまったのです

それから わたしは勿忘草の悲恋物語をしました
何故でしょう 知ってるかも知れないと思いつつ
ふっと 勿忘草の花が過ったのです

青年が 恋人の為に水辺に咲く勿忘草を摘もうとして
川に流され 死んでしまう話です
自分を忘れないでくれと その花を恋人に投げて

彼の女性は 考え深げに その話に聞き入り
そして 気に入ったようで わたしは嬉しくなりました
手柄でも採ったかのようで

それから 彼の女性は 事件について
ぼつり ぼつりと 話してくれました
異国の外交官が 亡くなった時の話です

どうして自分は 奥様を疑ってしまったのかと
刺したところも その短刀も見えてはいないのに
そう 自分を責めるのです

そして 令嬢が病床の母親と交わした話を
もっと詳しく わたしに聞かせてくれました
何故 話す気になったのでしょうか

その時令嬢は 異国の外交官を見たのです
屋敷に入って来るのを 急いで部屋を出たら
母親が 彼を迎え入れるのが見えました

そうです もう既に 深く傷を負っており
倒れ込むようにして屋敷に入って来たところをです
母親が受けて しかし 彼女は気が動転してしまって

彼女は 恐怖と絶望で我を無くし そこに彼の女性が
令嬢は それを ずっと見ていたのです
彼が 外に引きずられて行くのを 息を潜めて

これは 令嬢が病気になって最後の時
彼の女性に 初めて明かした事実です
どうして その時まで真実は伏せられたのでしょうか

関わった誰もが こと令嬢は 口を閉ざし
使用人達は 共犯者となって罪を背負い
それぞれの秘密として ひた隠しにしてきたのです

母親が どうしてそれ程までに取り乱したのか
それ程 彼を頼りにしていたのでしょうか
娘の最後の頼みの綱だったからでしょうか

その失望たるや もはや正気ではいられなくなり
夢と現実が 分からなくなるほ錯乱し
そして うわ言で何度も何度も言ったそうです

「心配しないで 大丈夫よ 大丈夫だからね
あの悪魔達 わたくしが退治してあげるわ」と
それは彼女の頭の中のことで 益々精神を蝕むことに

そして ちらりちらりと意味深なことまで漏らすのです
彼の女性は 告白が調書として残ると思ったようで
しかし わたしには理解できませんでした

ある時 彼の女性は こんなことも話してくれました
「奥様は お屋敷に危ない方を招いておいででした
それが 執事との確執が生じた原因なのです」と

母親と 父親の確執も
元を正せば 国の違い それよりも考え方の違い
「旦那様は 進歩的なお考えを恐れておいででした」と

そして わたしにこう請うのです
「奥様もお嬢様も 常に 人々のことをお考えなのです
だから祈って下さい お屋敷の方々の為に」

わたしには本当に分からないのです
今でも 彼女達が何を企てていたのかを
わたしにあるのは ただ『祈り』だけなのです

それらに隠された真実を 理解することはできませんが
恐らく重要なこと 秘密を打ち明けてくれたのだと
そのことが嬉しくただ嬉しく 感じたのです

やっと 認めてもらえたようで
そして 彼の女性の為に 心より祈ろうと
いえ心は無限に広がり 全ての人々の為に祈ろうと

いよいよ 処刑の日が来てしまいました
わたしは どうして申し開きをしなかったのか
結局 聞くことはできませんでした

それから 彼の女性の疑問についても
彼の女性は ただ一つ心配していた事ですが
「あの庭はどうなったのでしょうか」と

何度も問われましたが その日に至るまで
あの庭は 掘り返されることはなかったのです
その理由は 当時は分かりませんでした

すると 彼の女性は 複雑な表情を浮かべるのです
彼らが 未だ 土の中に置き去りにされていることに
哀しんでいるようにも ほっとしているようにも

いよいよ 彼の女性が牢屋から連れ出される時です
祈るように 彼の女性の滑らかな額に 聖書が当てられ
そして 一輪の勿忘草に 口づけをしました

高い所にある小窓から射す光が照らし出したその姿は
まるで受胎告知を見ているかのようでした
その美しさに 思わず感涙するほどに

看守達が 彼の女性の腕を縛り 牢から出しました
その時 置き去りにされた聖書と勿忘草を背にして
彼の女性が ほろりと わたしにこぼしたのです

「一房の勿忘草は 影ではなく 光だったので
お嬢様をのお心を支えた 一輪の光だったので」
一片の曇りもなく 晴々とした表情で そう言ったのです

わたしは 許されえる所まで彼の女性に伴いました
その言葉を その表情を 胸に受け 噛み砕きながら
そして 自然と言葉が口から突いて出たのです

「どうか あなたの元に救いがきますよう
主の御国がきますように
御子キリストの購いの元に 一体となって」

「一体？ わたくしは どうなるのですか」
「その身が朽果てようが 魂は主とともに
待つのです 御国が降りるその日まで 復活です」

わたしは 感動で胸が一杯で
思いつく限りを 口走っていたのです
それは 何も考えず 思うがままに

「どう言うことですか？ わたくしは わたくしは・・・」
「一体となるのです 主のもとに
愛されるべき神の子として 全ての基督教者が」

ああ わたしは軽率でした
彼の女性の晴々とした表情が崩れて行き
どうしようもない程の 憐れな顔に

「分かりません 分からないのです
わたくしは このままでよいのです」
わしは 何に彼の女性が戸惑っているのかも分からず

「怖がらないで 主は万人を愛しておいでです
勿論 あなたもですよ」
いいえ 彼の女性の悩みは 別の所にあるのです

彼の女性は 懇願するように訴えたのです
「いいえ ならば どうか
あれはなかったことにして下さいませ」

わたしは 理解できずに ただ 驚き
今であつたら 説く言葉も持ちえたであろうに
何が何だか 当時のわたしは うろたえるばかりで

自由の利かない状態で 身もだえしながら訴えました
わたしは 呆然とし立ち尽くすだけで
彼の女性が護送車に押し込まれるのを見ていました

余りの衝撃で 馬車が去って行っても暫くは
その後も どうすべきか成す術が分からないまま
処刑場へと 兎に角 急ぎました

わたしは 説得すべきであったのです
処刑を 多少 遅らせてでも 強引にでも
彼の女性の心を 落ち着かせるべきだったのです

本当に 可哀そうなことをしてしまいました
彼の女性は 処刑台に引きづられ
司祭様に 必死に訴える姿が見えました

自分を除名してくれるよう願っているのでしょう
しかし 司祭様には突然のことで
全く 理解できていない様子で

死刑囚にありがちな錯乱ととられたのでしょう
必死に請う彼の女性を遮って
十字架を その口に押し付けになりました

いいえ 違います
司祭様は 明らかに聞きとったはずです
彼の女性が 口走っている意味さえも

厳しい目つきで 首を横に振りましたから
押し付けられたその十字架は
まるで 彼の女性の口を封じるかのようでした

人々には 往生際が悪いと見えたかもしれません
わたしが 彼の女性の覚悟を砕いてしまったのです
彼の女性は 死など恐れてはいないのです

しかし それは 一瞬の そう 刹那
たった一人の その人に支えられ
彼の女性は 自分を持ち直したのです

司祭様の視線が 僅かばかり 民衆の方へと
彼の女性もまた 促されるように人混みの中へと
その視線の留まった先には あの弁護士の姿が

それから 彼の女性は 迷うことなく 跪き
今度は自ら 心静かに 十字架に接吻をして
潔い姿で 颯爽と立ち上がったのです

@@@@@@@@@@@@@@@@@
「そして 彼の女性は 天に召されたのです
その後 わたしは悩みました
彼の女性の揺らぎを 司祭様に言うべきか」

修道女が 零れ出る涙を拭き取ってくれた
「しかし 言い出せませんでした」
修道女達から漏れた溜息が聞こえた

「彼の女性の信仰は 紛れもなく真実です
これは わたしの大きな罪なのです
ただ 躊躇っただけなのです ほんの少し」

バンレンチノ神父は ゆっくりと頷いた
「どうか 追放しないで下さい 彼の女性を」
「ええ ええ」と 頷いて下さった

「あの時 告白の時 司祭様が諭されたのは
装うなどは 勿論 彼の女性にはあるけれど
いいえ 寧ろ わたしに対して

彼の女性の迷いを 見逃さぬように
その迷いを 取り払ってあげるようにと
わたしへの忠告だったのです」

「心配には及びませんよ 修道女ローザ
主は 全て お見通しです
彼の女性の心も 既に すっかり」

わたしは バレンチノ神父の言葉で
ずっと長年 誰にも言えずに抱えていていた心の錘の
ほんの一部が 消え去った気がした

「わたしは その人が何方かは知らぬが
きっと 今頃は 感謝しておいででしょう
主の愛に 愛に そう 愛に包まれて」

「ええ そうでなくては困ります
彼の女性は 愛されていていいのですから」
夜の祈りの時間を告げる鐘が鳴った

「どうか愛する姉妹達 祈りを捧げておくれ
わたしに構うことなく わたしに代わって」
修道女達は もぞもぞとして 躊躇っていた

わたしのお別れを 心配しているのだろう
ここで祈ると言う者もいたが みな礼拝堂へと送りだした
年老いて耳が遠くなつた修道女だけを残して

◇◇◇◇◇ 1 2 ◇◇◇◇◇

わたしの愛する姉妹マチルダ
わたしの為に わたしに代わって祈っておくれ
そして どうか バレンチノ神父 聞いて下さい

ここに居るわたしの姉妹は 充分年をとりました
耳が遠のき 不自由をしております
わたしの言葉も もはや聞こえてはいないでしょう

しかし この者には祈りがあります
きっと この者の最後まで その時が来るまで
森閑の中に 主の御言葉のみが響いていることでしょう

わたしは 禁を犯しました
自分の務めを忘れて 立入ったのです
賤しい好奇心から ああ 司祭様

いえ 確かめたかったのです
どうしても 彼の女性の躊躇いの意味を
そうせずには おれなかったのです

このことは全て 全部が わたしの責めなのです
それは 生きて行く上での 戒めとなりました
何時も 心奥深く 忘れずに ずっと

最後まで 彼の女性の視線の先にあったのは
『あの人』 そう それこそが『あの人』
彼の女性が 度毎口にした『あの人』なのです 度毎 たびごと

彼の女性を 遠くで見守るあの方は
その瞬間 顔に袋をかけられ 首に縄を括られ
颯爽と立つ姿に 何を思っていたのでしょうか

それでさえ わたしは疑っていたのです
真実であると分かっていながら
それでも疑っていたのです

何度も 何度も 彼の心を垣間見ながらも
その視線に その言葉に 衝撃を受けながらも
それでも疑っていたのです

多分 それは 恐らく それは 嫉妬
激しく取り乱しておきながらの 刹那 その刹那に
わたしは どうしようもなく嫉妬したのです

わたしではなく 何故 あの人と
わたしは『あの人』に嫉妬したのです
主への導きが 何故 わたしではなくあの人なのだと

それは暫く経ってのことです
どうしても気持ちが治まらず
気がつけば 彼の元に出向いておりました

分かってます 分かっているのです
そんなこと してはいけないことぐらい
でも いたたまれなくなったのです

何をしている時でも 聖母マリアの御前でも
主に祈りを挙げている時でさせ
苦しく わたしの心を締め付けるのです

懺悔を請うこともできたはずですが
しかし わたしはそれをしなかった
言いたくなかったのです 誰にも 主にでさえ

当時のわたしは その時のわたしは
このことで 苦しむべきと考えていたのです
罪を背負って 十分に苦しむべきだと

それには やはり 耐えきれず
遂に出向いて行ってしまったのです
あの人 彼の元へ 金貸の甥の所へ

孤児の家を訪問する外出届を提出し
そこで 彼を待伏せたのです
何度か そこで彼を見かけたからです

ええ 見かけたからこそ 徐々に
初めは偶然でした 回を増すごとに
宥め賺していた思いが 騒ぎ出したのです

彼は わたしを一目見るなり察したようで
それとなく 向こうから 話しかけてきました
きっと わたしの顔があからさまであったのでしょう

睨んでいたのかもしれませんが
怒りに満ち満ちていたのかもしれませんが
こと 非難めいた顔つきだったのでしょう

それでも彼は 穏やかに 親しみを持って
わたしに話しかけてきました
そうです 彼は まるっきりの紳士です

露骨なわたしに対してでさえ
そうであるのに 敬意さえ持って
ええ 彼は 本物の紳士なのです

「あなたも 思っているのでしょうか
どうしてあの裁判を受けたのかって
何か 下心があるんじゃないかってね」

単刀直入な言葉に わたしはたじろぎました
「勿論 そうですよ」と彼は笑って言うのけ
その予想外な言葉に 益々 面喰ってしまいました

「何でこの僕が 何の得もないことを？
そうでしょう だって僕は あの金貸の甥ですよ」
愉快そうに そんなことを言ってみせるのです

いいえ わたしは 思ってもみなかったのです
別の 全く逆の答えを望んでいたのです
そうです わたしは 本当は期待していたのです

「あなたも見たでしょう
人々が 何を望んでいるのかを
あなただって 感じたはずだ」

しかし 彼は 全く別の話をし出したのです
彼の女性とは 関係のない
わたしには 分からない世界の話を

「僕は 可能性を確かめたかった
人々の 民衆のです
あなたも 聞いたでしょう」

困惑しているわたしの意識を呼ぶように
「あれが 民意です 民意なのです」
と 声を弾ませ 言ったのです

「だって可笑しいでしょう そうでしょう
誰もが分かったはずだ 彼女は無実と
どうしてこんな不条理がまかり通るんです？

誰だって可笑しと思ったでしょう
誰が彼女を裁けると言うのですか
それなのに 誰が彼女を裁いたのです？

あなたも思ったでしょう
あんなの 我々の意思ではない
まして 神の意志などでは全くない

そうだ あなただって感じだはずだ
人々の嘆きを あってはならぬと 怒る声を
誰かの思惑で 全てが決まってしまうなんてこと」

しかし 最後の方では歯ぎしりするように
隠しようもない怒りを 押し殺そうとする様子が
とても 悔しそうで とても

わたしとてそうです
彼の悔しい気持ちが 痛いほど分かります
それ以上に 彼の様子に困惑しました

「知ってますよ そんな目で見ないで下さい
分かってますよ 僕は 十分に
人がどんな目で 自分を見ているかなんて」

そう言うよ 今度は皮肉っぽい笑みを浮かべて
「ええ いいんです 慣れっこです」と
わたしは その言葉 ドキッとしました

痛いところを突かれたような
そうなのです わたしも そうした目で
所詮は あの悪徳な金貸の甥ではないかと

例えどんなに尤もらしいことを言ったとしても
彼の背後には あの金貸がちらつくのです
そう『偏見』です どうしても拭えない偏見です

「僕も同罪ですからね
あの金貸の 共犯ですよ」
そう言って 大きくため息をついて

「僕は 小さい頃 とても楽しみしていたんです
プレゼントですよ 伯父からの
誕生日やクリスマスのプレゼントです

とても嬉しくて 次のプレゼントが待ち遠しくて
そして 僕は 伯父が大好きだったんです
あの男をですよ あの男を大好きだったんだ

伯父がどんな人間か
そのお金がどんなお金かなんて知らず
僕は待っていたんです

酷い子供でしょう 残酷な子供だ
人々が苦しめられるのを楽しんでたなんて
それを 心待ちにしてたなんて

伯父が どんな人間かを思い知らされたのは
転校生が来て この街からのです
それから僕の人生は 苦痛に変わった」

「たった10歳です たった10年生きただけでだ
僕の人生が これから始まろうとする人生が
地獄の日々へと 貶められたのです

小さな村だ 誰が誰だか分かるような
ことに悪評は 悪い事なら尚更 直ぐに広まって
それからというもの 僕のあだ名は『ユダ』だ

あのユダだ 裏切り者の
金の為ならなんでもする 守銭奴のユダだ
キリストを たかだか銀貨30枚で売った

僕が 誰を 裏切ったと言うんです
僕は お金をちょろまかしたことなくないのに
いいや 僕は伯父の贈り物を楽しみにしていたんだ

僕は だんだん 皆から孤立していきました
腹いせに 皆より賢くなってやろうと 勉強しました
見下す為に 勉強をしたんです

そして 悪いことの反対を 徹底的にしました
絶対に後ろ指を刺されない為に 徹底的にだ
『やっぱりね』と言わせない為にです」

彼は ちらっと わたしの顔を窺いました
「なんて顔 してるんです」
わたしは どんな顔をしていたのでしょうか

「ふん 偽善ですよ
僕のやることは 全てね 偽善です」
わたしは どんな顔をすればよかったのでしょうか

「満足ですか これで
僕は そう言う人間です
期待通り 正真正銘 金貸の甥ですよ

僕はね 伯父が卑劣な男だと分かっていつつも
どうやって稼いだ金かも分かっていつつも
その金で 大学に行ったんですよ」

わたしは その時 とても悲しくなったのです
とても やり場のない思いに襲われて
いいえ それはわたしではなく 彼のです

「そんな顔 しないで下さい
どうしてかな どうしてなのでしょう
困ったことなんですよ 本当 僕にとってはね」

きっとわたしは 惨めな顔をしていたのでしょう
彼が 耐えられない程に
わたしは 彼を 責めてしまったのです

「あなただってそうでしょう
伯父を 卑劣で酷い人間だと思っているのでしょうか
いや 人間以下 ならば 悪魔とでも

ええ 確かに どうしようもない人間です
悪党です どうしようもなく悪党です
しかし 小悪党です 大悪党ではないのです

どれ程 僕は憎んだでしょう
心の底から 心底 憎んでいるのです
しかし それは伯父自身ではない

伯父の所業をです
そうさせる 伯父の素養です
そうせざるおえない 伯父の弱さをです

悪党には 悪党の言分があるのです
悪の道に入らざるおえない事情があるのです
伯父は その道からの逃れ方を知らないのです」

「哀れですよ 全く
伯父は 自分でも分かっているんです
だから 僕は あの人を捨てきれないでいるんだ」

まるで他人事のように 彼は 淡々と話しました
わたしへの気遣いからでしょうか
一層 わたしは胸が苦しくなりました

「僕は どっぷりと あの男の息に浸かっているんだ
そう 僕は あの男の汚い金でできているんですよ」
と言うと 今度はにやっと意地の悪い笑みを浮かべました

「知ってますか？
純真さは 悪魔の好物だってこと
あなたも気をつけた方がいい」

そして 沈黙のまま わたしの顔をじっと見つめ
少し 苛立っているのか
神経質に 彼の赤い眉をひくつかせました

わたしは 動けなくなりました
彼の変わりように 恐れをなしたからです
いえ それ以上に その真意を知りたくなったのです

「知りたいですか 事実を？
ふん あなたの様な人には関係のないことだ
神の家で 祈りだけ挙げていればいいんだ」

忌々しように 彼は そう 吐き捨てました
しかし その声には悪意は感じられませんでした
ただ 苛々したようすではありましたが

「嘘っぱちですよ
彼女が 奴隷の身から解放されたなんて
彼女達は あの人を とことん利用してきたんだ

知っていますか
あの屋敷で 何が成されていたかを
華やかなサロンの裏側に どんな企てがあったかを

女は恐ろしい
時として 破壊的な想像をめぐらす
それも いとも簡単な様子で 何食わぬ顔をして

彼女達は 本当 恐ろしいですよ
元を突きつめれば 個人的な恨みだ
それを 神の御言葉で覆ったりなんかして」

彼は 大きく息を吸って 少し置いてから
「ああ 本当に性質が悪い」と
吐く息とともに 呟きました

「彼女達は 変えようとしていたんだ
この社会を 人々の意識をね
自分達なりの正当な屁理屈を捏ねて

サロンの実態は 人々の意識の改革だ
何も知らない奥さん連中を集めては
思想家達を招いて 演説ですよ

それにあの人も駆り出されていたんです
否応なしに目を惹く あの容姿だ
彼女達にとっては あの人は象徴なんです

自由と平等と博愛精神とか なんとかの
ああ それだけであるのなら
神の愛を解くことに 何の問題あると言うのです

彼女達 こと婦人に於いては 未亡人の方です
復讐を企んでいたのです
国家諸ともひっくり返しかねない程の激しさでね」

わたしは 彼の話に恐ろしくなりました
だって 国がひっくり返るなんて
人々が また 殺し合いを始めるのかと

「夫人が 果たして 何処までを望んでいたのか
国をひっくり返すなど それは言い過ぎでした」
彼は すかさず否定しましたが

「夫人は 外国人だ それも我が国よりも進んだ
そして 溢れんばかりの財産がある
知性と教養のある 美貌の未亡人だ

屋敷には 危ない客達も押し寄せてきましてね
危険な思想の 本物の運動家達だ
支援もしていたんです 時には匿ってやたりまでして

危ない客は それだけではなかったのです
危険な思想とは ある者達に都合が悪いという意味です
そう そのある者達が 最も危険なわけです

夫人の活動は有名だったが 見逃されてきました
ご主人という大きな庇護があったからです
しかし 彼の死後は そうでもなくなってきてね」

「悪い奴には 悪い奴が寄ってくる
悪党には よからぬ話が入ってくる」
正直 わたしには 彼の話が難しいものでした

「伯父は 陰謀を嗅ぎつけたのです
資産家未亡人から 財産を取り上げようという
それも 彼女の名誉を地に落してね

つまり 夫人に尤もらしい罪を被せて
財産全部を奪い取ろうって魂胆ですよ
昔の魔女裁判です 卑劣な 魔女狩りです」

ええ 本当に 彼の言うことが理解できなかったのです
恐ろしいことが起ころうとしていたのだ
この世は不条理なのだということだけは分かりましたが

「僕の伯父は 独身だ
ずっと独身を貫いてきた
人を愛せないまま きてしまったんです

僕だってそうだ
何時も後ろめたさを感じて
呵責に耐えながら 生きてきたんです」

「いや 伯父には呵責なんてなかった」
彼は ふっと 思いついたように否定しました
「そうだ それまでは・・・」と

「ああ そうだ 伯父は嫌っていたんだ
貧乏人を とことん嫌っていたんだ
良心の呵責なんて 持ってやしなかったんだ

伯父だって 元は小作人の息子ですよ
貧しさのあまり 子供は死ぬか売るしかない
伯父は そんな貧乏が嫌で嫌で 憎んでいたんだ

子供の頃の成しようもない自分を 見ているようで
ただ されるがままの貧乏人が 嫌なんです
何もしない無能な奴等と 貧乏人を蔑んでいたんです

どうしても抜け出したかったんだ
何時も 足掻いていたんです
虐げられるだけの人生から 抜け出そうと

金 金 金 金だけが頭を占めて
いつの間にか 悪党の手先ですよ
結局は 否とは言えない下僕のままじゃないか」

彼は腹立たしげに 視線をわたしに向けたました
「いけませんか 希望を持っては？」
突然の視線と その言葉はわたしは扱られるようでした

「伯父の様な 僕達の様な者が
希望を持っていけませんか
小悪党は 真っ当な夢を見てはいけないのですか

強大な権威が 消え去ったからと言って
一体 何が変わったというのです
庶民の暮らしのどこが変わったというのです

寧ろ 貧乏人はより貧乏に
僕等を抑えつけている重石は 一向に退かない
ただ 重石が錘に代わっただけだ

そんな失望と喪失の中で 一筋の希望を見たとしたら
それにかけてみたいと思ってはいけないのでしょうか
この現状を 変えたいと思ってはいませんか

伯父は 正にそれなんです
自分は 悪に穢れるしか道はないと諦めた中で
伯父 一筋の光を見たのです」

体中 何かがありました
わたしは 益々 混乱して行きました
彼は一体何を言っているのだろうと

「伯父は あの親娘に期待したのです
ああ 滑稽な話だ
柄にもなく 鬘なんぞ新調して

自分でもしでかしてやろうって 感化されたのです
伯父の頭で考えることだ 碌なもんじゃないが
それが 金持ちから金を巻き上げることです

逆に利用されて豚箱入りですがね
同じ頃に 親娘を陥れる企みを知りましてね
助けようと思ったのですが そこが また 伯父だ

自分が あの親娘の庇護になろうと思ったのです
伯父は 裏事情を知りすぎる程知っていますから
助けられるのは自分の他にいないと思ったのでしょうか

ああ せめて僕が傍にいたなら
ローマン的な言葉で持って 口説いてもご覧なさい
僕とて自信はないが 伯父よりはずっとましだ」

彼は わたしの方をちらりと見て
「ああ 口説くって その あれだ」
と言って 軽く咳払いをしました

「僕は 当時 北部にいましたから
本当のところ 状況はよく知らないのです
当時の僕は 全くの無関心でしたからね

伯父は あの通り 教養もなにもない男だ
口のきき方だって横柄で それに 汚い
致命的なのは あの顔だ 僕も人のことは言えないが

伯父は 本当に あの親娘を救いたかったのです
あなた方には信じ難いことかもしれないが
どんな犠牲を払ってでも 助けたかったのです

なのに 何一つとして思いは伝わらなかった
伯父は 心底憧れていたのです 異国の婦人を
それなのに そうであるのに 死へと追いやってしまった

伯父は夢を見たのです
知性溢れる美しい恋人と 新しい社会を語り合う
眩いばかりの清い生活を まっさらな生活です」

「どうしました 気分でも悪いですか」
わたしは 震えていたのです
様々な思いを巡らして

年寄達の言葉が過ったのです
危険な思想 新しい社会 改革といった言葉の
暗示する未来と 嘗ての蛮行が 重なったのです

昔 教会が頻繁に襲撃された頃の話です
修道院を追われて 多くの修道女が逃げてきました
新しいことには何時も 破壊がついてまわるのです

今でも 時々 そうした者達が逃げて来ます
彼らは どうして わたし達を目の敵にするのでしょうか
どうして そっとして置いてはくれないのでしょうか

そんなわたしの心情を察したのでしょうか
「僕は この世の全てを壊したいとは思わない」と
そうは言うけれど わたしには脅威です

「僕は この国の国王陛下を尊敬してます
伝統も芸術も そして人々も 愛しているんです
改宗なんて 全く 考えていませんよ」

わたしは その言葉に ぎくりとしました
「僕は何度も誘われたし 考えもしたがね」
敢えて 彼の方は穏やかに努めているようでした

「そうさ 彼女達だって
大それたことまでは 考えていなかったさ
彼女達は 敬虔過ぎるほど人々を愛していたんだ

恐らく 性分さ
元が 不正が我慢ならぬ性分なだらうね
元々 潔癖な性分なのさ

夫への復讐は 口実でしかないんだらうね
それが 自分達の生きるべき使命だと思ったのでしょう
彼女達が理想とする世界の実現ですよ

僕だってそうです
気に入らないから破壊するなんてこと
ただ 可笑しいことを正したいだけなんです

伯父でさえ そうなのです
やはり こんな世の中は可笑しいのです
それを態度に示しただけなのです」

@@@@@@@@@@@@@@@@
前よりも 随分と呼吸が辛くなってきたようで
マチルダの祈り声が聞こえない
大きく蝋燭の照らす影が 揺らぐのが見えた

わたしがマチルダを探しているを察したのか
バレンチノ神父が 身を乗り出して
わたしの耳元すぐで教えてくれた

「彼女は あなたに代わって祈ってますよ」
バレンチノ神父の声が 遠くではあるが
まだ 聞こえたことに ほっとした

誰かが わたしの零れた涙を拭ってくれて
その手の温もりが どうしようもなく暖かく
夜の礼拝が無事終わったのだと安堵した

「バレンチノ神父 わたしは気付かされました
誰の心にも 神はいるのだと
悪党と言われる人々の中にもです」

バレンチノ神父の「ええ ええ」と頷くのが聞こえ
過ぎてしまった若かりし日々の未練を宥める様に
早まる思いの苦しい息遣いを 整えた

◇◇◇◇◇ 1 3 ◇◇◇◇◇

彼は 神の家を壊すなどしない
きっぱりそう言って 帰ろうとしました
しかし わたしには 心残りがありました

それは とても素直な気持ちで出て来ました
「あの勿忘草は あなたですか
あなたが 彼の女性に送ったのですか」と

たじろぎはしたものの 直ぐに 彼は微笑みました
今まで見せたことのないような 柔らかな表情で
それが とても自然で

『はい』とも『いいえ』ともなく
しかし その表情で 確信しました
そうなのです 彼の他に誰がいるというのでしょうか

聖書は わたしが差し入れたものです
しかし あの勿忘草は
わたしでなければ 彼の他にはいないのです

どうして その時まで気が付かなかったでしょう
ああ 小窓から射す僅かな光が照らしたのは
勿忘草に唇を寄せる 彼の女性の姿

わたしは なんとか引きとめようと
「随分とお調べになったのですね」
と 咄嗟に口が喋っていました

彼は 被った帽子をまた手に持って
手持無沙汰に縁を両手で回して 足を止めました
少し はにかんだ様子で

「ええ 調べました

殆どは 伯父から聞き出したものですが
それを基に 調べたのです」

わたしは 正直 驚きました

彼の顔が さっきまでの顔とは違っていたからです
まるっきり そう 素の顔です

強張った口元も 神経質な赤毛の眉さえも
まるで別人のように 解れてしまって
視線は遠く 彼方を追って

まるで 熱にでも 曬されたかの様に
「あなたは 彼女の瞳を知っていますか」
と 切なそうに言ったのです

胸が締め付けられるほどに

「僕は 彼女の瞳を見たのです」
彼女 そう彼の女性の黒い瞳のことです

「彼女の目は くっきりと大きく
真っ白な中の黒い瞳は 何処までも黒いのです
溺れそうな程に 底かないのです

しかし その瞳に一端光が射すと
輝きの中に 闇は沈んで行き
そこに世界が浮きあがってくるのです」

そう言うと 彼は左手で米神を抑えました
度々見せる仕草です
彼の癖なのでしょう 感情を抑える時の

ええ 知っていますとも 彼の女性の瞳を
告白の際に見せた 思いの先には
常に『あの人』が

そして 裁判に於いては
とても切なく 狂おしい程に
彼の女性に向ける彼の視線があったことを

「あなたに想像がつくでしょうが
今の伯父の状態を
どんなに惨めな思いでいるのかを」

彼の表情は すっかり 弁護士の顔が無く
一人の人になっていました
何処にでもいる 有り触れた人です

「伯父は すっかり塞ぎ込んでしまって
殆ど自分の部屋から出ようとしないのです
食事も碌々喉が通らないようで

一日中 マリア像の足元に平伏して
許しを請うているのです
惨めったらしいたら 見てられませんよ

夫人にです
あの未亡人に 許しを請うっているのです
伯父にとって夫人は 正に 聖母なのです

やっぱり ああ 僕は甘いんだ
伯父を 法廷に引きずり出すことができなかった
それができたのに することができなかった」

「あの時 本当に切羽詰まっていたのです
それなのに 僕は 無視し続けてしまった
何時もの厄介事かと思って

僕は再三 伯父から手紙を貰っていたのです
至急 自分の所に来るようにと
伯父が捕まる3か月前からでしょうか

そうです 夫人が亡くなる3カ月ほど前
伯父が 善からぬ企みを耳にした頃でしょう
それを 僕は 知らぬ振りを決め込んだんだ

新しい連中に夢中だったし
それより 何より 否定したかったんだ
僕は 守銭奴の仲間じゃないってね

僕が誰かなんて 全く知らない都市で
とても解放された気分でした
誰も僕を『ユダ』なんて呼ぶ奴はいない

ああ 魔の手は緩めることなんてありやしない
拱いた伯父は 執事にそれとなく忠告し
しかし それを 夫人は裏切りととってしまった」

「厄介なことに あの屋敷には 危ない客 外国人だが
某国で国王暗殺を企てていた連中が捕まりましてね
名簿に その青年の名も連ねてあったのです

彼の女性が ふっと洩らした言葉を思い出しました
夫人と元執事との仲違いの本当の原因です
『奥様が危ない方を招いていた』と

「高官位貴族の子息で主要人物ではないこともあって
外交官とは 国の監視付きで体のよい国外追放ですよ
悪党どもが これを利用しない手はない

彼以外にも あの屋敷に集まって来る連中ときたら
捕らえようと思えば 口実のある連中どもだ
伯父は ない頭で必死に考えたのです

屋敷に危険な連中を近づけない方法はないものか
政府の魔の手から逃れる手はないものかと
切羽詰まっていたのです どうにもならない程に

それがあの下策だ
一途の望みをかけた執事は叩き出されてしまって
自ら出るしかないと 打って出たのです」

「ああ 喜劇にさえならない滑稽さです
伯父はつくづく下衆な男だ」
彼は 然も悲しげにぼやきました

「本当は あの夫人 高貴な未亡人を
極めて滑稽なことですが
最新モードで洒落込んで 香水まで振りかけてですよ

どうであれ ただ 率直に伝えればよかったんです
ああ 日頃の賤しさが それをさせなかった
余りにも崇高過ぎたのです彼女は 伯父にとって

伯父は すっかり卑劣さが板についてしまったんです
真意とは真逆の 思いもしない言葉を吐いたりして
夫人の最も大切とする人に恥辱を味あわせたのです

伯父はそのことで ずっと 今でも 苦しんでいます
どうにもならない自分の素地を恥じているのです
夫人が亡くなった時でさえも 人並みになれない自分を

確かに あの伯父のことだ
あわよくばと 令嬢への下心が疼いたかもしれない
自分を見下してきた奴らの鼻を明かしてやりたいとも」

「僕が 漸く 伯父の要請に応じたのは
夫人が亡くなる少し前のことで
伯父は すっかり気落ちして 別人のようでした

その時 あの屋敷のことを聞かされたのです
世間話としてです 多額の債権のある家の
借金の形に婚約をしたことなどは聞かされずにです

ああ そうだ その時 僕は不思議に思ったんだ
どうして伯父は そんな話をするのだろうってね
伯父の特別な気持ちなど 想像さえしませんでしたよ

間もなく 捕らえられる破目になったわけですが
伯父に同情する気など全くありませんでした
寧ろ 罪を償うことに 喜びを感じたくらいです

僕は 伯父が逮捕されたその日に帰りました
本当に関わりたくなかったんです
当時の僕は 伯父にかまっている暇なんてなかった

伯父の夫人への気持ちや 令嬢との婚約については
ずっと後になって 聞かされました
恩赦が決まった時です 皇太子ご成婚の」

「あの屋敷の権利は 今は 伯父にあります
直ぐにでも掘り起こして差し上げたいのだが
伯父は 奴の言いなりだ

奴は青年の遺体の発見を恐れているのです
僕は 伯父が呑まないことを承知の上で
裁判では 庭を掘り起こす訴求をしました

大悪党を 脅してやろうってね
小さな抵抗です 気晴らしにもならないが
あいつの思い通りには やはり嫌なんです

僕は 掘り返させますよ 絶対に
死者達を 神の足元で眠らせてあげるのです
でも 彼が居でもしたら いや 居るのです

外国の高官貴族の子息の話は収穫でした
あの屋敷から消息をたったのですから
勿論 逃げ延びていることを祈りますがね

もしも 我が国の秘密警察が手をかけたとしたら
国際問題にまで発展する可能性がありますからね
ああ こんな話 あなたは知らない方がいい」

「本当に忌々しい

僕は 心底 怒っているのです
腸が煮えくりかえるほどにね

僕は 新しい物語をつくらねばならない
伯父を悪役にした 若い恋人達の悲恋の物語です
結局は 大悪党の後始末をさせられるんだ

伯父は 彼女達を救えたと言えるのだろうか
確かに 危険な連中を蹴散らすことも
国家の陰謀も回避できたが

しかし 彼女達の名譽を傷つけてしまった
誤解と策略を重ねた末
結果 彼女達を追い詰めてしまった

伯父は 獄中の中にあっても
使いの者に 屋敷の様子を報告させていたのです
屋敷に人が近づかないように 誹謗を流布したりも」

彼の女性の告白を思い受けべ 彼の話とが
言葉や表現に違いはあれど 重なって
其々を思う苦しい胸の内が 慮れました

「大悪党は 人の脅し所を心得ている
絶対に否とは言えない所を突いてくるんです
どんな人でも屈さずにはられないような

あなたも噂で聞いたでしょう
獄中で死んだ 男のことを
彼女もそうです そうなるはめにあったのです

どっちにしろ 死刑は決まっていたがね
どうにだってできるんだ 全く 理不尽だが
金と権威があれば どうにだって

ああ そうだ そうなのです
僕は 彼女を牢から出すことだってできたんだ
牢番に金を掴ませてね 奴を脅したっていい

そして どこか遠くで
国家の力が及ばないところにも行って
生きいくことだって できたかもしれない

でも 彼女はそれを許さなかったでしょうね
何処までも気高い精神で
民衆の為に その身を捧げることを選んだんだ

「彼女は すっかり支配されてしまったんだ
彼女達に その博愛精神だかとやらに」
彼の左手が また 米神を抑えました

「いや ああ 違う 自らです
自分の意思です 彼女の
彼女は 僕に 委ねてはくれなかった

彼女は 一切 僕には話してはくれなかった
あの屋敷で起こったことを
しかし それは 僕が金貸の甥だからじゃない

あなたも 彼女の瞳を知っているでしょう
僕は 見たんです
彼女の 深い 深い 瞳の奥を

僕等は 戦うことを選んだのです
それは ほんのささやかな抵抗でしかないが
僕には大きな偉業です この命を引き換えにしても

僕は 常に 悩んでいました
北部の都市で 新しい生き方に情熱を傾けつつも
自分の士気の低さに どこか甘いつてね」

「若かったんです 何もかもが
無鉄砲に 何にでも顔を突っ込みましたよ
全てが新鮮で その全てが正しい様に思えて

どうしても変わりがかった
伯父の柵から 逃れたかったんです
自分の全てが古臭く 間違いだらけな気がして

北部では 随分と無茶をしました
仲間とつるんで 酒も浴びたし 賭け事だって
放蕩の限りを尽くしましたよ

拳句 賭けで大負けして
僕の父は 田舎の木端役人で金はないし
結局 伯父に肩代わりしてもらって

そのうち 何かが違ってきた
どこか違和感があると言うか
北部の連中とは 何か相容れないものを感じて

強い国家に野望を抱きながらも
どこか 乗りきれない
冷めた自分がいるのです」

「それは 生い立ちのせいだと
本当の苦痛を知らないからだ
本当の飢えを知らないからだ

金は どこからか降って来るし
最終的には 伯父の懐からですが
天下分け目の戦争だって人任せでしたし

否定しようが 振り切ろうとしようが
僕は 伯父を当てにしてしまう
伯父が僕に甘いのをいいことに

伯父は 僕に期待を懸けていましたから
自分は無知無学 その上 無教養ときている
僕の言いなりですよ

僕の士気が上がらないのは
そうして腐った根性が災いしているのだと
楽な方に流される自分に 失望していたのです

仲間が 嘆願書を携え議会を襲撃しようとした時も
僕は わざと風邪をひいて 家で寝ていました
寸前 それは未遂で終わりですがね」

「それもこれも 僕が卑怯者だからなんです
ああ やはり『ユダ』なんだ
どうしようもなく 自分を責めて責めて責めました

会員達は逮捕され 首謀者は処刑されました
僕の所にも 当然 憲兵がやって来ましたが
直ぐに釈放です またしても伯父です

自分なりの 最もな言い逃れを用意していたのに
悪党仲間の縁故でも使ったのでしょうか
全く 僕は 救われようがない

そんな状態の中で 伯父の要請に応じたのです
そしてあの時 気付かされたのです
彼女の瞳に映る 自分の姿を見て

あの時 本当に僕は ああ
救われようのない絶望の中にいたのです
偽善をすることで紛らわしてはいたが

穢れた自分を 洗い流す様に
不幸な人々を探し巡って
遂に ジプシーの娘に辿りついたのです」

「全身 稲妻に打たれたかのような
強い衝撃を受けました」
俯き加減であった彼の目がぎらつきました

「そこで そう 法廷で述べたように
そこで 僕は 彼女に出会ったのです
知人の医者連れ 慰問している最中でした

原っぱのジプシーテントを歩いている時
小さな男の子 姉も見てくださいと言われて
僕達は 連れられて行きました

その娘は もう手遅れだった
うわ言を言っただけで 意識が行ったり来たり
恋しい人を待っているかのような様子でした

いや 実際 待っていたのです
どんな力も残されていようはずが無いのに
その娘は 寝床から身を乗り出して

それは 正に奇跡です
必死に向けられた視線の先には 彼女が
沈みかけの夕陽に照らされ 彼女が現れたのです」

ええ そうです あの時です
彼の女性が 告白の最中
大きく心乱したあの時です

「後で 娘の仲間達から聞いた話ですが
その娘はずっと待っていたそうです
その 彼女が迎えに来てくれることを

ああ あなたは怒るかもしれないが
娘にとって彼女は 聖母なのです
救いの道を示す 聖母なのです

以前 助けられて 金と服を恵んで貰って
ええ 上等な仕立ての服を着ていました
多少 擦り切れて 地味ではありましたが

しかし 僕は その時 僕は
激しい感情に揺さぶられたのです
理性が 自分の意思が 効かないほどに

獣だ 正に獣だ
彼女を独占したい欲求に駆られたのです
その為なら 破滅してもいいとさえ」

「実際 破滅させてしまいましたが
彼女は そんな僕に失望し去ってしまった
娘も後を追って行きました 亡骸を残してね

しかし それは 刹那
あそこにいる他の誰が感じ得たでしょう
それは たった一瞬の衝動です

そうだ あれこそが 刹那だ
その一瞬の間に 僕は彼女の瞳を見たんだ
彼女に映る自分の姿を

ああ 正に 刹那ですよ
永遠の衝撃です
僕は 彼女の魂に触れたんだ

あの娘には 悪くしてしまいましたが
今でも それは悔いています」
彼は 本当に 申し訳なさそうに

わたしは 思わず「違う」と言いそうになりました
確かに 彼の存在は衝撃ではあったでしょうが
やはり 彼の女性を追い立てたのは 違うのです

しかし彼は 悲観するどころか
うっとりとした様子で
それも 耽美な世界に酔うかのように

「ああ あれがもしも北部の地であったなら
僕はすぐさま駈け出して
彼女を 強く 抱きしめたかもしれない

ああ そうだ
そうしてきた様に 一時の夢に酔いしれて
醒めた朝に 幻滅して

しかし 僕は そうしなかった
決して 理性が勝ったわけではなく
彼女が そうはさせなかったのです」

わたしは 別な世界に迷い込んでしまった
そんな気に させられました
今まで 味わったことのない世界にです

「僕は 余りの衝撃に 居たたまれず
その日のうちに 北部へと向かったのです
眠っていた何かが 目覚めたようで

「運命です
神が与えたもうた宿命です
こうなることが決定付けられていたのです

それ以前にも 僕は彼女に会っているのです
薄汚れた酒場の路地で
賭けで作った借金を 伯父に頼みに来た時です

穢れを流す為に 不幸を探していた最中のこと
とても不釣り合いな女性を見つけたのです
無理に阿婆擦れた風を装って

僕の呵責が チクリと痛みました
人は生れた時は 皆 無垢な子供のはずです
それを 周りがそうはさせておいてはくれない

あんなのは その場凌ぎの偽善です
僕は 彼女を穢れた世界から遠ざけようと夢想した
慰めにしかならぬ幾ばくかの金を恵んで

しかし 彼女の瞳は真直ぐで そして 深く
その奥底には怒りが 溢れんばかりに
高潔な怒りです 僕など到底及びもしない」

「瞬時に悟りました

彼女の存在に 詮索をしてはいけないと
それこそが 正に啓示です」

令嬢の父親が 伯爵に撃たれた時のことです
彼の女性が 良心の呵責に耐えかねて
歓楽街を徘徊していた時のことです

「その時の彼女が 再び目の前に現れるなんて
直ぐには 一致しなかったが
漠然と 酒場の彼女を思い出していたのです

早く北部に帰って 僕は 試したかった
変わった自分を感じたかったのです
見る全て 感じる全てが ましになっていると

確かに 見るもの全てが素晴らしく
初々しく 新鮮に心に迫ってきました
全てのものに 感謝してまわりたいほどです

しかし それは 全く違っていたのです
期待したものとは違った形で
全く逆の意識で 現れることとなったのです」

「彼女への思いが募るほどに

周りの者たちが 煩わしくなったのです
つるんでいた仲間達がです

理想の未来に向かって 夢を語り
同じ目標を持つ仲間であるはずなのに
益々 疎外感を感じる様になったのです

うっかり南部訛りの言葉が出ようものなら
田舎者とからかわれ 訂正されたり
南部は保守的で遅れていると馬鹿にされたり

信仰を捨てずにいることで絡まれてりもしました
それまでだったら 全て聞き流していたでしょう
しかし 何故か 無性に 嫌悪感を覚えたのです

連中の言葉の端々に うんざりさせられました
言葉も 信心も 自由を奪って
自分達の価値を押し付けようとしていると

北部の下に組みされるはご免被ると
言葉も 信心も 古臭い伝統も 何もかも
どうして僕は捨てねばいけないのかと」

「また 子供の頃から聞かされてきたことが
頭の中で ぐるぐると巡りました
年寄達にいい聞かされてきたことです

新しきは 地上の苦難さえも取り去ると囁かれ
しかし 新しい宗派が齎したのは何でしょう
その結果 我々農民は どうなったのでしょうか

唆されたのです 反旗を翻すよう
農民達は自由と平等を胸に立ち上がりました
しかし 土壇場で裏切られたのです

敗北は もっと過酷な状態に農民達を陥れ
深い恨みとなりました
僕の中にも その根は植え付けられていたのです

あの醜い歴史を思い出して下さい
改革の筈の新しい教えは どうなったでしょう
国の思惑に取り入って 戦争を起こしたではないですか

僕は つくづく 思い知ったのです
自分は 南部の人間なのだと
連中達とは 相容れない間柄なのだと」

「だからと言って 全てが否定できるものじゃない
やはり 連中達の考え方は刺激的だ
全てが全て 悪いわけじゃないんです

一つ一つに合点が行くのです
ただ 根ざすものが違っただけなのです
そして考えました 自分に足りないものは何かを

情熱です 動機です
それよりももっと大切なものとは
酒場での彼女の深い瞳が 脳裏に蘇りました

そうです 最も 僕に足りないものは
あの溢れんばかりの怒りです
高潔な怒りです

貧しい人の中を巡ったとて
それを 僕は 実感として感じていなかった
気の毒とは思えてもです

それでも暫くはだらだらと北部で暮らし
南部に戻ったのは 伯父の恩赦が決まる数年前です
別の県ではありましたが」

「伯父は 頻繁に手紙をよこす様になって
『出所できる様何とかしてくれ』と
身体に自信が持てなくなったのでしょうか

無論 僕にはそんな伝手はありませんから
奴にでも 泣きついたのでしょうか
つくづく 性根の腐った人間ですよ

自分の敬愛して止まない夫人の忘れ形見
あの令嬢が気がかりであったのも事実です
自分が ここで果てたら 誰が守るのかと

本当に 迷惑な話ですがね
彼女達は 逞しい そして 賢い
伯父の手など かえって邪魔なのに

ああ 本当に気の毒な人です
命が削られる中で 考えたのでしょう
僕に 令嬢の保護を 求めてきたのです

その時 初めて 伯父の心を知りました
どれほど惨めな人生なのだと 哀れみました
初めて 伯父を憐れに思ったのです」

「勿論 僕は 婚姻については断りました
伯父には 出所した暁には 婚約を反故にして
債権さえも放棄させるつもりでいました

そうであるのに ああ
伯父の出所後に あんな悲劇が待っていたとは
誰があんな悲劇を招いたのでしょうか

僕は その時 漸く 知ったのです
彼女が 何処の誰かを
そして 彼女こそが 高潔な怒りだと

裁判は 既に道筋が決められていました
僕は 奴らの思う通り 計らえばいいのです
あの裁判は 見せしめです

主人に盾を突いたらどうなるか
自分達の権威と権力の見せつけです
反逆心への戒めです

しかし 僕は これを絶好の機会と捉えました
奴らの裏をかいてやろうと
人々の意識を目覚めさせようと」

「それは 何より彼女の望むところですから
彼女が 戦うことを選んだのですから
言葉に出さなくとも 僕には分かりました」

彼は 生き生きとして 目を輝かせました
「僕等は 変わるのです 国も
やはり 変えねばならないのです 自分達で」

しかし わたしは やはり恐ろしくありました
そんなわたしに 彼は 更に 力強く
張りのある声で 言いました

「だって あの裁判は 可笑しいのです
彼女は 誰も殺してはいないのに
あなただって 怒りを覚えたはずだ」

確かに そうです
わたしは 抑えようのない怒りを感じていました
思い出しても 怒りが顔に身体に滲み出て来ます

「そうでしょ？
だったら あなたも立派な革命家だ」
驚くわたしに 彼は冗談暈しに笑いました

「僕だって 利用してやったんです
あの裁判での言葉は 僕の覚悟の誓いです
全ては 彼女へ向けてです」

彼の視線は 力強く
わたしの心を 攪まえ揺さぶりました
そして 何かの 奥底で目覚め出したのです

「僕の中では 闘志が燃えています
高潔な怒りが 燃えあがっているのです
それは 彼女が示してくれたのです

僕は 偽善を止めます
伯父には 償いをさせます
今まで いたぶってきた人々への償いを

令嬢が引き取った子供達に 僕は会いました
そして 確信しました
彼女達の意味は 確実に 受け継がれていると

法廷でも見たでしょう
若者達の声も 若い婦人達の声も
あなただって その一員なんです」

「しかし 若者は 兎角 過激に走り易い
そして 被れやすく 魔されやすい
僕が そうでしたから

古いものを悪と見なして 破壊するのは簡単だ
そこに 自分達の理想郷を作ればいいのだから
しかし 悪いところのみを改善するのは難しい

それまでの僕は 悪魔の意思のみに耳を傾け
奴に反することをしてきたにすぎないのです
でも今は 内なる主の御言葉を聞くことができます」

この上ない至福に 彼は 跪きました
両手を天に大きく広げ広がる空を仰ぎ見て
そして 大地に口づけをしました

「全ては 彼女が示してくれたのです
僕は 彼女を通して知ることができたのです
どうか祈って下さい 僕達の為に 国の為に

主の御言葉に忠実であるますように
どうか 常に 思い起させて下さい」
わたしは 自分の内に湧き上がる力を感じました

「やはり 僕は 救われたいのです
伯父だって そうです
僕がちゃんとした人間にしてみせますよ

自分を見つめることは 辛いことです
塗れ過ぎた伯父にとっては 尚更のこと
絶対に 人々を愛せる様にさせます」

わたしは 彼にかける言葉を探しましたが
彼の女性の言葉 ただそれだけを伝えました
『一輪の勿忘草は光であった』と

「吹き去った風は 触れた一片の花弁を惜しみ
降った雨は 一株の花の根元深くで夢見るのでしょう
流れた行った水は 一輪の花の思い出を懐かしみ」

彼は微笑み 空の向こうに消えて行きました
何時からいたのでしょうか 仲間たちがおりました
声をかけそびれていたのでしょうか

そこに このマチルダもおりました
わたし達は 見送る彼の後ろ姿に
何度も十字を切り 主のご加護を祈りました

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

「このことは わたしの戒めとなりました
何時の時も 何の時も忘れないように
わたしが犯した過ちとして

ああ バンレンチノ神父 司祭様 そうなのです
わたしは 勝手に人を判断してしまっていたのです
表面だけを見て 奥底の苦しみを見逃したのです

初々しい若者の恋を微笑ましく思う一方で
大人のそれを 軽んじていたのです
彼らの愛が 何であるかも知りもしないで

それに 何故 信仰を取り下げようとしたかです
令嬢に 主のお恵がないことへの苦しみもあったでしょう
増して 彼の女性は 恐れていたのです

全ては これに尽きるのです
あのジプシーの娘から逃げ出した時に於いても
そうです 怖かったのです 愛されることが

何時も 周りに わたしに 問うていたのです
自分は 愛されていていい人間かと
あの裁判の最中でさえもです」

随分と胸が苦しく 息を吸うのが辛くなってきた
しかし それは暫くのことです 時期に麻痺して
寧ろ 重荷を降ろして ほっとした気分になった

しかし やはり 彼の女性のことを考えると
心が痛むのだ
今であったなら 慰めの仕様があったのにと

それから・・・

「姉妹達 特に若い妹達

わたしの様なことのない様 願います

どんな人の内にも 主の御言葉あるのです

常に その御言葉に耳を傾ける様

人々に寄り添って欲しいのです」

果たして 最後の方は聞き取れたであろうか

啜る泣く声が 耳をかすった

いよいよ自分は弱ってしまったのだと感じた

「修道女ローザ 随分と話されて 少しお休みなさい

その間 わたしがある話をして差し上げよう

あなたの慰みになればいいのだが」

あれは わたしが まだ 見習いの時です
ある紳士が教会にいらっしゃいました
以前より 度々 過分な寄進を頂いている方です

見るからに とても神経質そうで
自分の出を 後ろめたく思ってもいるのでしょうか
人を寄せ付けない雰囲気がありました

実際 先輩達の中にも 彼を避ける者がいました
しかし わたしは さほど 嫌な気はしませんでした
寧ろ とても興味を持って見ていました

決してハンサムとは言えませんが
その身だしなみに たち振る舞いに
若いわたしは 憧れさえ感じました

何と言おうか 都会的な洗練された感じがあって
何気に出る北部訛りにさえ 嫌味がなく
身のこなしも てきぱきとして 無駄がないのです

確かに 時折 ぎよっとする程の鋭い視線で
赤毛の眉を ひくつかせることがありましたが
大抵に於いては 穏やかな方でした

その紳士が 葬儀を依頼されたのです
その方とは 少々わけ有りの方で
詳しくは言えませんが あるご婦人です

その婦人は 亡くなるにはまだ若く
さぞかし悔いのあることと 想像していましたが
その顔は 至って穏やかで 澄んでいたことを思っています

また婦人は 真新しい純白のゆったりとしたドレスの
柔らかなレースと 張りのある黒髪との調和が美しく
婦人の顔を一層くっきりと引き立たせていました

生前の婦人は さぞやエキゾチックで魅惑的に
人の目を惹きつけたであろうと想像ができました
高い鼻筋に しっかりとした眉が 特に印象的で

葬儀は 人目を避ける様 ひっそりと行われました
紳士と 老人と 雇われた人達でしょうか
それでも 当時のわたしは 身の高ぶりを感じました

どうして わたしは高ぶったのでしょうかね
曰く付きの葬儀だったこともありましたが
わたしにとって 彼が特別であったからかもしれません

田舎の農民出身の少年にとってその紳士は
余りにも衝撃的だったのです
少年には 理想の大人の男性として刻まれました

その敬愛する紳士が 婦人を連れてきたのですから
やはり どんな婦人であったのかと想像が膨らみます
いいえ 初めは 何時もの慈善かと

その紳士は 時折 貧しき者の葬儀を
自らがお金を出して 挙げてやっていたのです
だから 何時もの好意かと思ったのです

そして老人はやけにぐしゃぐしゃに泣き崩れ
婦人は 老人のお嬢さんかごくごく身近な人かと
何れにしる その紳士の好意だと思ったのです

しかし その老人ときたら 紳士に始終纏わり付いて
その様子が まるで べそをかいた子供のように
少々異様にも見えたが

それに老人は 禿げて貧相な感じではありましたが
白髪混じりの縮れた赤毛で 所々 紳士に似ており
後で その紳士の伯父だと知って 驚いたものです

葬儀が 肅々と流れる中で
紳士の 何時もとは違う深刻さに
否応なしにも 気が付かされました

だからと言って 何時もはいい加減であるとは
そんなことは 決してないのです
ただ 何時もとは違った雰囲気ということですよ

死者を 気の毒に思うといよりは
全く違った 何かとても崇高な
賛美です そう『婦人の死』への賛美です

勿論 深い悲しみを湛えているのは見て取れました
しかし その瞳には 淀みなく 静かに深く
奥底で 何かが煌めいているのです

何時も物怖じしない隙のない姿勢は
何処となく 頼りなさげで
いいえ『頼りない』ではありませんね

それは まるで 聖母マリアに膝まつくように
そう 全て捧げて 身を投げ打つかのように
身も 心も 魂の全てをです

まだ何にも知らない 経験の浅いわたしにとって
人が 思いを露わにすることは 驚きであり
今でもあの戦慄は 感動と共に残っています

人は これ程までに人を愛せるものか
男は これ程に 女を愛するものか
受ける婦人の慈しみ深い微笑みに 震えました

何時も装い 身を固めている紳士が
その婦人を前にしては 全くの無防備なのです
誰に憚るとこともなく

それは 一瞬のことでした
背筋をすっと伸ばして 毅然としていた紳士が
一瞬 身も心も魂諸とも 砕けそうになたのです

それは 棺の蓋が閉められ際のことです
彼が 彼女の顔に愛おしそうに顔を寄せ
彼女の唇に接吻をしたのです

別れ難く 離し難く 引く彼の涙が
婦人の頬を伝って 流れました
思わず 目を覚ますのではとさえ期待した程で

その光景を すっかりと老いぼれてしまった今でさえ
鮮やかに 思い出すことができます
あれ程美しい光景を 見たことがあるでしょうか

その瞬間だけで 後は しっかりとした面持ちで
喜びさえ 湛えている様にも見えました
婦人の存在に対する 喜びでしょうか

後に 彼が言ったことですが
死して 初めて 婦人に触れることができた
自分の その腕で 抱きしめることができた

わたしには 驚きでした
ずっと 何年も 何十年も 寄り添ってきたのかと
お互いの心を知り尽くした同士なのかと

正に これこそが 主の思し召し
悲観的な死と憐れに思い 迎えましたが
彼らに至っては 祝福そのものでした

感動の余り 涙が零れそうにさえなりましたが
老人の泣きようが 余りにも見事であったので
お蔭で わたしは涙を堪えることができました

それ以降からです
その紳士は 変わられた
わたしの印象が 変わったのもありますが

人を寄せ付けない黙した言明は
すっかりと 取り下げられ
温厚さだけが 残りました

それは わたしが 開けっ広げな心を
あの無防備な状態を
垣間見たせいに因るところもあったでしょう

より身近に 親近感が湧きました
また 親子以上も年が離れているというのに
一端の大人の如く わたしを扱ってくれました

それが嬉しくて 彼の助手を自ら買って出たり
彼は 子供達の教育に熱心でしたので
その寄進集めの為の運動をして下さったのです

その活動に伴って 方々出かけたものです
村の有力者や事業家達の説得に当たり
寺の学校を造るのに 大変 尽力いただいたのです

わたしは 彼の全てが好きでした
特に あの目が
穏やかではあるが 底は煌めいているのです

村に向かう馬車で揺られながら彼が言いました
その弁護士が言ったような言葉です
彼も また 若者に向けて

「わたしは 国を愛してます
人々を 特に若者達を
この年まで生きて やっと 実感したのです

この国は変わります 君達によって
君達が 変えるのです
しかし 若者は 兎角 道を見失いがちだ

国を愛するが余り 暴走するでしょう
意に沿わないものは 悪と見なして
破壊や殺戮をするかもしれません

そんなことは あってはならないんです
それこそが『私欲』そのものなのですから
『崇高なる怒り』なくしては」

そうですか そうなのですね
あの瞳の奥に燃えるものは
『崇高な怒り』だったのですね

彼は 人々は未だ目覚めたての赤子なのだと
故に 教育が必要なのだと言っていました
村々の細部の貧しい子供に至るまでもが

人は盲目的に従うのではなく 考えるべきだと
『崇高なる怒り』を持って 口に出して訴えるべきだと
可笑しいことは『可笑しい』と

そして 彼も また わたしに言いました
「人々の為 国の為 祈って下さい
若者たちが 主の御言葉を忘れぬように」と

ご婦人が所有されていたというお屋敷は
国に没収されてしまいました
今は 孤児院になっています

あなたも 行かれた事があるかもしれませんね
ここより2時間ほど行った田舎です
彼が嘆願したのです 国王陛下にまでかけあって

彼は ご自分については語りませんでしたが
その婦人について 言ったことありました
ただの一回きりですがね

自分の生れは賤しいが故に 虚栄を張りがちだ
妻となる人は 名のある家の娘と決めており
実際 上流婦人のお眼鏡に適ったこともあったとか

しかし いざ結婚となると 心が引けるというのです
自分の生れに負い目があるということと
それ以上に その婦人の姿が過るのだと

掻き消そうにも 寧ろ 鮮明に
否定しようにも 一層 狂おうしく
心に迫って来るのだと言うのです

それが 何時しか 善悪を押し量る基準に
何か 決心をする時には
彼女の黒く沈む瞳に問いかけるのだと言うのです

「それまでの自分は 悪魔にお伺いをたてたのです
想像できますか 君？
悪魔の好まないことをのみ やって来たのです」と

当時の司祭や先輩から聞かされていました
彼の善行を 誰人種民族隔たりなく
その彼から そんな告白を受けようとは

そして 尚も婦人について話しました
そうした思いは 何処から来るのか
それは 同類を憐れむ気持ちからだろうと

初めはそうだったのかもしれない
上流社会にも加われず 何か事を成すこともできず
自分より不幸の中で 優越を感じたかったのだろうと

しかし 彼女は違っていた
彼女の気高さは どんな状況に於いても清く
寧ろ 自分の惨めさを思い知らされたのだと

だから 彼女は自分には委ねてはくれなかのだと
わたしには どんな意味かは分かりせんでしたが
とても そのことで 彼は苦しんだようでした

胸が引き裂かれんばかりの苦しみ様が一転して
彼の瞳が 輝きました
葬儀に見せた あの哀しみの中での煌めきです

「彼女は僕に 生きる姿勢を示してくれた
僕が生きてる限り 引き継ぎます
彼女のあの瞳の奥の闘志を

ねえ 君 ああ 聞いてくれるかい
この上の無い幸福を 僕は手に入れたんだ
最後だよ 正に 最後のその瞬間にだ

彼女が 遂に 受け入れてくれたんだ
遂にだ 僕をだよ 間違いない
あの瞬間に 僕達は結ばれたのさ」

その紳士は 婦人の葬儀の際に念書を入れました
自分が死んだら 婦人の墓の隣に埋めてくれと
今では 寄り添うように 二つ墓が並んであります

人目につかない 少し奥まった所です
ひっそりと 誰も邪魔する者などなく
春には 勿忘草で賑わっていますがね

ああ 修道女ローザ
彼らを誰が引き裂けると言うのです
主がお許しになられませんよ

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

「ええええ」と

返事をしているつもりであったが

恐らく 言葉にはなっていないよう

司祭様の手がわたしの額に乗せられた

今までの苦しみが嘘のよう呼吸も心も

芳しく広がる香油とともに全てから解き放たれて

あの後 すぐ屋敷の中庭は掘り返されて

青年の存在は公表されることなく令嬢共々

やっと神の下に召されることができた

そして世の中はどう変わったのだろう

国は 人々の意識は

権力は 未だ 一部の者が握っているけれども

上からの抑圧に 大小様々な暴動が各地で起きた

鎮圧はされたが 最早 人々の意見は無視できず

少しずつ採用されるようになってきた

これから どう変わって行くのだろう

彼が危惧するような新たな権力の暴走がないよう

どうか人々が主の御言葉を忘れませぬよう

アーメン

奥付

89

今も 有る度ごとに過るのです
お嬢様のお優しいお声が
わたくしの心を 戒めるように

「お前だけは傍にいておくれ
わたくしにもしものことがあったとしたら
どうか 子供達を頼みます」

そうですお嬢様は仰ってくれたのです
「わたくしの大切な人」と
このわたくしをです

ああ それなのに
わたくしは何と驕った人間なのでしょう
自分の身分も弁えず主人になった気になって

いいえ 何も違わない
わたくしが 女王様にもなり得たならば
わたくしはジブシー女にでもなったのです

とても大切なもののように
わたしのその手を両手で包みこみ
「あの娘はわたくしなのです」

ぼそぼそとした小さな声で 呟いた
「わたくしなのです
もう一人の わたくしなのです」

わたしは ただ 衰れに思えて頷いた
「わたくしが死んだのです
わたくしの 大切な心が……」

9 1

わたしは その時 若かった

経験も まだ 浅かった

主の御言葉のみが万能と思いこんで

罪を犯す者は心が弱いからだと思っていた

その弱さが悪魔を惹きつけているのだと

無知が主を遠ざけているのだと

わたしは その時 とても恥じた

自分の未熟さに 浅はかさに

もの事を分かった風に思いこんで

果たして誰が罪びとなのか

悪い人間のみが 罪を犯すのか

罪人全てが 神への反逆者なのか

わたしは検討違いな自分を恥じた

道を誤った者を諭すことが使命だと

主の御心を 教え授けることが使命だと

そして 浮き立った自分を恥じた

どこかの誰かの物語のごとく

興味本位で聞きいてしまったことに

読書上の注意

毎週水・土発行（予定）

14回／14回

この作品はフィクションであり、っぽい団体・人物・事件とは多分きのせいで、

一切関係はなく、全て架空のものです。

また、某民族・人種・団体・職業を傷つけたり、蔑視するものではありません。

不快に思われた方は、申し訳ありません。

勿忘草の伝説：[ウィッキペディア参照](#)

よきサマリア人：[新約聖書 ルカによる福音書 10 章 25-37 節](#)

おまけ 時代背景

全く関係はないと言いつつも、基となるものがあるもので・・・。

この物語は、18・19世紀にドイツ地方を基にしました。

神聖ローマ帝国が崩壊した後、幾つかの国家に分裂しました。

この物語での北部はプロセインで、南部はバイエルンを基にしました。

その流れから行くと、出てくる宗教は、基督教のカソリックとピューリタンとなります。

歴史的背景や事件については、年号通りではありませんが、沿って思案しました。

時代的背景の設定としては、フランス革命がにより啓蒙思想が欧米に広まり、

アメリカでは独立し、イギリスでは奴隷制度が議論されている時代。

ドイツでは、ナポレオン軍とプロセイン軍が激しくぶつかり合い、

フランス軍勝利により、プロセインでは国家統一運動がおこります。

その後、運動の担い手は、新興市民階級から労働者へと変わり、

英ではチャーティスト運動、仏ではフランス二月革命が起こります。

独では、統一に向けてドイツ三月革命が起こりますが失敗。

プロイセンを中心としたドイツ帝国（1871年）が成立するも、

暫くバイエルン王国は特権が許され、今でもその独自性は残っているようです。

20世紀に入って、その後、バイエルン地方はどうなったでしょう。

第一次世界大戦後、アドルフ・ヒトラーが指導者となり、
バイエルン州にナチスが誕生し、やがて強大化し中央政権を掌握、
世界の表舞台へと台頭して行くこととなるのです。

詳しく書くときりがないので、ざっくりと書いてみました。

ウィキペディア参照

奥付

遠い国のおはなしシリーズ 勿忘草に口づけ

(2014年6月4日完成)

著者： 荅田 カエル

著者プロフィール：

感想はこちらのコメントへ

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83791>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

遠い国のおはなしシリーズ 勿忘草に口づけ

著 苔田 カエル

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
